闘論！倒論！討論！２０２５第９１６回
参院選直前！危機の中の日本の現在と正体

R7/7/1

パネリスト：
　宇山卓栄（著作家）
　大井幸子（国際金融アナリスト・武蔵野大学客員教授・株式会社 SAIL CEO）
　大高未貴（ジャーナリスト）
　ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）
　藤和彦（経済産業研究所コンサルティングフェロー）
　矢野義昭（元陸上自衛隊小平学校副校長 陸将補）

司会：水島総
＊＊＊＊＊＊

水島「皆さん、今晩は」
一同「(礼)」
水島「闘論！倒論！討論！２０２５第９１６回目の討論となります。間も無く参議院選の公示が始まりますけれども、今日は『参院選直前！危機の中の日本の現在と正体』ということで、こういう話を内外の問題を通して皆さんにお考え戴きたい、そして知って戴きたいと思います。メディアは、こういう問題について殆ど報道しなくなっています。諦めたのか態とやっているのか、先週も丁度、我々が議論した時に、国分太一さんのパワハラの問題とかね、ちょっと待てと、向こうは、バンカーバスターをやって、どうだ、こうだってやっているのに何故、国分太一のパワハラとか、そんな問題になるんだ。これがメインですよ。ちょっと本当にびっくりしましたけども、ここまでメディアの状態がプロパガン

ダ機関になってしまっているのかという感じがしました。
そういう中で、我々は少し冷徹、冷静に、今の時代、日本が今、置かれている立場、そして、もう一つ、世界が今、どういう潮流になっているのか、これも、皆さんと共に話し合うことが出来ればと思いますので宜しくお願いします。では、ご出席の皆さんをご紹介します。元陸上自衛隊小平学校副校長で陸将補の矢野義昭さんです。宜しくお願いします」
矢野「宜しくお願いします」
水島「国際金融アナリスト、武蔵野大学客員教授、株式会社ＳＡＩＬ、ＣＥＯ、大井幸子さんです。宜しくお願いします」
大井「宜しくお願いします」
水島「経済産業研究所コンサルティングフェロー、藤和彦さんです。宜しくお願いします」
藤「あ、宜しくお願いします」
水島「ジャーナリストの大高未貴さんです。宜しくお願いします」
大高「宜しくお願いします」
水島「著作家の宇山卓栄さんです。宜しくお願いします」
宇山「宜しくお願い致します」
水島「そして歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」
モーガン「お願いします」
水島「今日は以上の皆さんでお送り致します。早速ですけれども、この切り口というのは色々あると思います。今、日本の置かれた状況、それから世界の状況ですけど、やっぱりメインになっているのはトランプ大統領が行った中東の停戦合意ということで、本当に、破壊したのか、しなかったのかと色んなことが言われています。これからのことで言えば、誰もあれで収まるとは考えてないというようなことで、この問題、そしてウクライナも、いよいよルハーンシク州ですか、ロシアが全土を占領したっていう発表が昨日ありました。
ウクライナの方はロシア領に色んなものを撃ち込んだり、攻撃したりしているっていう形になっています。そして我々の国、ちょっと一部、それから中国の方では習近平の失脚説まで出始めているっていうね、まぁ、そこまで行くかどうか分からないけれども、大変、権力基盤が弱くなって来ているという報道なんかも色々あります。
本当に世界はもう動いていますけど、日本は参議院選挙を目指して、政治家の皆さんは、一生懸命、やっておりますけどもね、本当に嫌になっちゃうっていう感じがしますけど。でも、それにもめげずに真面目に色々日本の事を考えてみたいと思います。矢野さん、まず国内、国際情勢があると思いますけど、国際情勢で今、感じていることですね」
矢野「はい」
水島「どういう流れになっているかということを、皆さんの判断を伺いたいんですけども」
矢野「はい。今、ご指摘があったように今回の大きな動きっていうのは、やはりイランとイスラエルの停戦合意」
水島「はい」
矢野「これが曲がりなりにもトランプ大統領の仲介で成立したということですけれども、これが、どういうことを意味しているかということなんですが、私は結論的に申し上げると、これでイランの核化というか核保有というのは、もう止められなくなったということで、これによってイスラエルも中東域内での核属性が終わると」

水島「うん」
矢野「相対化されるということで、中長期的には、中東域内で、例えばイランの対抗馬であるスンニ派の盟主を自認しているサウジですね。サウジも核潜在能力を持っています。それからトルコも、やはり原発稼働して同じような能力を持っているということで、少なくともイスラエルとイランとサウジとトルコ、更にエジプトが加わるかもしれませんが、その域内に於ける中東の大国が一種の核の局地的な相互抑止関係に入って行くということで、むしろ、それによって、これまで不安的だった中東情勢がある程度、線引きが固まって行って安定化に向かって行くのではないかと思います」
モーガン「うん」
水島「そうですね」
矢野「中長期的にですね」
水島「はい」
矢野「また大国の介入、まぁ、大国と言うと、今、アメリカ、ロシア、中国ということになるかもしれませんけど、いずれも利害関係が、この中東に対して、まぁ、敢えて言えば中国の中東原油の依存度が高いということで、今後とも介入のインセンティブが働くかもしれませんけれども、基本的には中国、ロシア、アメリカ共、この中東に死活的国益をかける必要が無いということですから、大国間にも抑えられるということで、中東が一つの塊になって行くと。
それで世界的に見ると、ウクライナとイランの問題というのは連動していますから、アメリカの今のトランプ政権の基本政策は、あくまでアメリカ・ファーストであって、まずは国内の立て直しで本土防衛だと。それと対外的には主敵は中国と定めていますから、このウクライナと、それから中東で貴重な軍事資源を無駄遣いせずに一刻も早く安定化、終息方向に持って行って、対中正面に軍事資源を集中するというのが今のトランプ政権の方向だと思うんですけれども、その方向に乗って、今回、バンカーバスターを使った空爆という手段を執ったと。
これは紛争をエスカレートする為ではなくて、むしろ潰したという口実によって、イスラエルのそれ以上の軍事介入と言うか、或いはイラン攻撃を抑制すると、そういう意味合いでやったんだという風に思いますね」
水島「なるほど」
矢野「これによってイスラエルは一応、イランの核能力は当面、奪うことが出来たということで、ネタニヤフ政権としては国内向けにアピールが出来ると。イランはイランで負けたということにして、最初は潰されたということに、あからさまに反対していたんですけれども、途中で姿勢を変えて、我々は能力を奪われたと、大変な被害を受けたということを敢えて言っていると。これは言い方を変えると、本当はそんなに被害を受けていない。もう核能力は維持できたと」
水島「うん」
矢野「しかし、敢えて、それを言うと、またイスラエルが挑発されて攻撃してくるかもしれない。アメリカも介入して来るかもしれないので、ここは一応、潰されたということにして、その代わり査察は受け入れないと。結局、能力があるか無いか分からない。核開発をやっているかやっていないか判らないという、まぁ、イスラエルがあぁいう風に執って来た曖昧政策を今後、イランがやっていくと。
つまり、さっき申し上げたように相対化されていくということで、今言った様な展開になって行くだろう。だからウクライナについてもアメリカの基本的な戦略に則って、近々収拾の方向に向かって行くと思います。そうすると問題は、ＮＡＴＯがどうなるかというこ

とですけれども、アメリカは、もうＮＡＴＯから引いて行くと。つまりアメリカ・ファーストですから。
ヨーロッパについては、もう自前で防衛をしてくれということになるので、私はヨーロッパの域内でも東欧とか北欧、つまりロシアと直接地続き国境を接している所は、核抑止能力を同時に持つという方向に行かざるを得ないだろう。だからヨーロッパについても、やはり域内での今迄のイギリスとフランスだけの核独占じゃなくて、例えばドイツとか東欧圏、ポーランド辺りが核の潜在能力というのを持つ方向に行くだろうと。
だから要は、中東にしろ欧州にしろ、域内での核の拡散というのが広がって、逆に域内でパワーバランスがとられるようになると。それが地球規模で見ると、大きな緩衝地帯になって、例えばロシアとアメリカとか、こういう直接の対峙というのが無くなって行くという風に思います」
水島「うん」
矢野「ですから、もっと大きく見れば世界的に多極化をしていくと」
水島「うん」
矢野「その多極の中で、緩衝地帯がグローバルに広がって行くんですけれども、その時、最後に残されたホットスポットが日本周辺と。北東アジアということになる。ここで次のステージでは、中国とアメリカとの対立が今度は主正面となる訳ですけれども、その時に正にヘグセスが言ったように、日本が第一列島線の前線国家であり、要だということで、軍事的な中国の太平洋進出圧力を一番、中心になって正面から受け止めることになるのが日本だと」
水島「うん」
矢野「そういうことを考えると、例えば、今回の参議院選挙でも、こういう問題を正面から捉えて本来、国会で真剣に議論しなきゃいけない。それを、今、やらないと間に合わないというところまで来ているのに、全く目先のことだけ自分達の当面の利益だけ、利益の配分をどうするかという問題で終始しているということで、完全に世界に対する情勢の敏感さと言うか、情勢が激変しているにも拘らず、それに対して全く反応していないと。結局、日本が、こういう状況ですから、多分、追い込められて気が付いた時は、もう身動きできない状態で、まぁ、日本の国益に関わらず、ある場合は矢面に立つかもしれないし、ある場合は蹂躙される」
水島「はい」
矢野「或いは、見捨てられるというようなことになるかもしれない。これは、特に米中間の力関係で決まって来ますから、今後、アメリカがヨーロッパとか中東に、引き続き足を取られて身動き出来ないということになれば、力の空白が出来るので、中国は冒険主義に出て来る。国内の不安定を外部に展開する為に、敢えてそういう軍事的冒険をやるかもしれませんし、逆に中国が国内で混乱して崩壊すれば、大量の難民が来るというようなこともあり得ますし、いずれにしても、ここで日本が本腰を入れて国をあげて、総力で防衛体制を執らなきゃいけないにも拘らず、そういう自覚は全く無いと。国民もそういうことについて殆ど声をあげないと」
水島「そうですね」
矢野「これが現状だと」
水島「はい」
矢野「本当に心配ですね。このままで行くと、ここ数年で日本は大変なことになる。国家的危機を迎えると思います」
水島「この問題については今、おっしゃる通りで、国会では全く議論されていない。だか

ら、こういうことが取り出されないっていうのは、意図的なところがあるんじゃないかっていうね、あまりにもねぇ、普通はね、今、矢野さんが言ったように、この間、二人で対談しましたけど」
矢野「えぇえぇ」
水島「本当に、そういうようなことが普通に話されていいはずでね。全くされていませんからね」
矢野「特に中間に立っているメディアが問題だと思いますよね」
水島「そうですね。全く執り挙げていませんから」
矢野「それから自ら発言して国民を導いて啓発すべき立場の政治家が何も言わない」
水島「そうですね」
矢野「これは、もう完全な一種の言論封止というか、既得権を守る為の保身だと私は思いますね」
水島「はい。これもメディアの問題で、変質しているメディアということと、また、あとで、この話も色々してみたいと思います。では大井さん」
大井「はい。今、矢野先生がおっしゃられた通りだと思うんですね。私は経済の方から見てみたいんですけども、イスラエルとイランの例のバンカーバスターが爆撃してっていう、あの辺りは本当にねぇ、トランプ劇場のやらせじゃないかっていうくらい筋書き通りではないかと思うんですね」
水島「そうですね」
大井「それで金融の方から見ていると、もう株式は、とにかくバンカーバスターが落ちて、それで、どうなる、どうなるって週明けから、ぼ〜っと上がる訳ですよ。暴騰する訳ですよ。これは何かって言うと、みんな、やらせだって解っていて、じゃあ、株価って上がるだろうっていう、普通、あれだけ爆撃されて、イランの原子炉はどうなったなんて、もうメルトダウンかみたいになるとですね…」
水島「いや、そういう話は一切、出ませんからね」
大井「もうブルって株どころじゃないなんて思うんですけれど、ところがどっこい、株がメルトアップしちゃうっていうことで、これは、もう完全にウォール街の内部の人達は、やらせでトランプ劇場が全部シナリオ通りによく進んでいるなと。それで６月１７日に、もうロシアとアメリカ、まぁ、プーチンさんとトランプさんが話し合って、イランの核は、俺達が引き受けてやるわと。ちょっと預かるから、こういう風にバンカーバスターでやって、少し落ち着こうっていうプロレスで言うと…」
水島「いや、おっしゃる通りです」
大井「もうリングの中のレスラー同士の打ち解けた会話とか、そういうものが全部、聞こえて…」
水島「はい、身体で感じるっていうね」
大井「もう、お前、こっちひっぱたいたら、こっちだぞ、みたいなことをやっているような、筋書きは勿論、見ている我々観客には判らないですけれども、全て仕立てられていて、その通りに動いたなと。金融は金融で、そういうことを見抜いて、先にどんどん買っちゃう人達が居る訳ですね。このロシアとアメリカ、それからイラン、先程、おっしゃられたサウジも含めた中東の関係っていうのが、原油を中心に一つのカルテルって言うんでしょうかね、利益共同体を完全に形成しているなっていうのが見えて来ると思います」
水島「そうですね」
大井「今回の場合、ロシア、それからアメリカも原油を掘って、掘って、掘りまくれっていうことを言って、原油を産出して、天然ガスもそうですけど、世界に輸出しろと。日本

も買えと。そこまで来ている訳ですよね。
水島「うん、そう言っていますね。はい」
大井「サウジ、それからロシアとイランもそうですけど、イランの原油は、矢野先生がおっしゃったように、殆ど中国の方に輸出されていきます」
藤「うん。うんうん」
水島「うん」
大井「あのホルムズ海峡が封鎖されたら、みんなが困る訳です。中国も困るし、まぁ、日本も困るし」
矢野「(頷く)」
大井「それで石油が売れなくなったら、サウジもロシアも財政悪化で大変に困るので、それで一応、原油を巡って、今迄、我々はＯＰＥＣというイメージでしたけど、ＯＰＥＣプラス、まぁ、トランプ、ロシアみたいな大きなカルテルが出来て…」
水島「そうですねぇ、大きな産油国ですもんね、はい」
大井「全員が、ここで原油価格を安定させようみたいな裏技があったと思うんですね」
水島「う～ん」
大井「それで、そういう経済的な合理性に基づいたディールっていうのがあって、矢野先生がおっしゃるように相互抑止関係がちゃんと出来上がって、気が付いたら、やはりトランプが一番、そのシナリオ通りにやって、トランプの言う通りになったみたいな形じゃないですか」
水島「はい」
大井「それで今後、どうなるかって言うと、ウクライナについてもイランとの交換条件って言うんですかね、プーチンさんがトランプさんよ、もう、これ以上、ウクライナには、金も出すな、手も出すなと」
水島「うん」
大井「そうしたらイランと裏交渉してやるっていうのが前の交渉でやって、それでお互いに握り合ったディールが成立したっていうところじゃないかと思います」
水島「そうですねぇ」
大井「ウクライナもアメリカの復興基金が入っていますし、だから、ちゃんと経済合理性に基づいて何処で儲けるかっていう、その儲けるポイントみたいなのがもう全部、ちゃんと張り巡らされていて、矢野先生がおっしゃった軍事的な相互抑止関係と、それから金銭的、まぁ、金融的に何処でお互いに利益を取って行くかっていう、何か、それが、もう、しっかり出来上がっているなっていうのが見えます」
水島「そういう感じですよね。今になると、トランプが爆弾を落とす前に、サウジアラビアとか湾岸諸国を周ってね」
大井「うん。全員に…」
水島「イスラエルには何故、行かないんだと色々出ましたけど全部、説明がつきますね」
大井「そうですね。６月の前の丁度一か月前、５月にトランプさんが中東訪問してね」
水島「下打ち合わせしていたっていう（笑)」
大井「そう。下打ち合わせで、３日で２兆ドルですか。投資マネーが来たみたいなニュースになっていましたけど、そこでお金と色々な関係が全部、出来上がって行って…」
水島「そうですよねぇ」
大井「そうですね。それで、じゃあ、日本は、そのプロレスのリングの中にも入っていないという（笑)」
藤「(笑)」

大井「プレイヤーでもないし、あのう…」
水島「そうなんですよ」
大井「何処かから見ているっていう感じですね」
水島「それも桟敷じゃなくてね」
大井「遥か向こうです」
水島「もっと遥か向こうの席に居て、金だけ出せって言われて」
大井「だからトランプ劇場に入れて貰えない（失笑）」
水島「いや、ほんと、そうですね」
大井「それで高い席料を払ったら入ってもいいぞみたいな、ちょっと辛い立場に置かれているように思います。私も日本について参議院選挙で言うと、もう本当に矢野先生のおっしゃった通り、もうホットスポットで、そこのホットスポットに居る我々自身が殆ど丸裸で立っているっていう自覚すら無いんですよ」
水島「うんうん、うん」
大井「そこで参議院選挙になって、まぁ、根本的に、私は今の選挙そのものについて言うと、何故、こんなに議員数が多いんだと。こんなに要らないでしょと。それで皆さん、何をやっているんですかと」
水島「ほんと、そうですよ」
大井「２４８席もあって」
水島「五百ねぇ、いくつ」
大井「まぁ、その選挙の定数に従って選ばれる訳ですけれども。でも考えてみるとアメリカと日本を比べると、アメリカって日本の３倍、人口が居て、衆議院に匹敵する下院は４３５。アメリカの議席数ですね。参議員にあたる上院は５３しか無いじゃないですか。だから参議員が２４８っていうのは、何故、こんなにあるんですかと。
それと、参議院の議席を今の三分の一か、もう十分の一でもいいですよ。何故、こんなに議席があるの、要らないと。それと、もう一つ言いたいのは、議員に立候補する人に資格試験、テストをして、憲法九条を言ってみろとか」
水島「あぁ、一種の教養試験ですね（笑）」
大井「教養試験じゃないけど、もう日本って色んな資格試験がありますよね」
水島「はい」
大井「ですから議員に立候補するんだったら、最低限の教養っていうことで試験して落とした方が、足切りにした方がいいんじゃないかと思うくらいです」
水島「今、現在の奴が、みんな落ちちゃったりしてね（笑）」
大井「もう、あのう、試験して落とした方がいいぐらいです」
水島「そうですね」
大井「まず、そのぐらい、そもそも、この参議員、要るのか要らないのかみたいなところから、国民が本当に考えてもいいぐらいだと思います」
水島「そうですね。はい、有難うございます。あとで出ると思いますけど、一つ特徴は、政党政治っていうのは、もう終わったんじゃないかっていうね」
藤「うん、うん」
水島「こういうことも言われています。では藤さん、お願いします」
藤「はい」
水島「はい」
藤「冒頭、『地球温暖化理論の嘘』という本が、７月１日に発売されたばかりなものですから、ちょっと本の宣伝をさせて戴きます。私は別に地球温暖化には前から興味がありまし

たけど、本を書く程の蓄積は無かったんですが、ここに木本協司さんっていう方がいらっしゃるんですけど、この方は別に大学の先生でも気候学の専門でもないんですけど、民間の凄く奇特な研究者でいらっしゃいます」
一同「うん」
藤「この方の売りっていうのは多分、日本人で唯一だと思うんですけど、これは２０１９年ノーベル物理学賞を貰った日本人の真鍋淑郎さん。そのあと、例えばハンセンとか一連の４人のモデラ—が居て、この人達がＩＰＣの嘘っぱちのモデルをつくり上げたんですけど、この人達全員とメールでやり取りして論破している人ですよ」
水島「あぁ」
藤「ただ、やっぱり日本って、どうしても肩書重視なもんですから、無視され続けて来て、それで、たまたま私をネットで知って戴いて原稿を送って来られて、私は、はっきり言って文系ですから物凄く難しい論文が来たんですけど、これは、こういうことですかって、何十時間も話した上で、私が解る範囲で書いた一切、数式の無い本になっているんです」
水島「あぁ、それは大事ですね」
藤「えぇ。この売りは、よく出て来られる杉山さんとか大高さんも最近、温暖化の関係で嘘だっていうことで色々理論闘争をやって戴いているんですけど、この本の唯一の売りは、ノーベル物理学賞を取った真鍋さんの理論が真っ向からおかしいっていうことを書いているんです。
それから、もう一つは、所謂、地球温暖化って後ろに利権団体が居るんじゃないかっていう話があるんですが、元々の利権は誰だったかっていうことも木本さんが調べて、それを書いていますから、それ読みですから、もし御関心があれば読んで戴きたい。まぁ、色んな今の地球温暖化を巡る嘘八百は、今日、来られている大高さんとか杉山さん辺りがやって戴けていますけど、大元の部分で、いかにおかしいかっていうことを根元からぶった切ったつもりで書いた本ですから、もし、ご興味を持ったら読んで戴きたいと」
水島「うん、大事な本ですね。はい」
藤「先程、水島社長がおっしゃいましたように、本当に世界的に見て、今のアメリカのトランプ政権もそうですけど、結構、日本では一切、報道されていませんけれど、世界で３０以上の国々で気候学の専門家で２千人近い人が、気候変動って二酸化炭素が原因じゃないっていう声明を出しているんです。全くの嘘っぱちだと言っているのに、日本の学者だけは雀の涙の様な研究費が欲しいかどうかは知りませんけど、そればかり言っていて、最近、環境省の某大臣は地球温暖化がデマだっていうデマサイトを見つけたら、それを対策するような特設サイトを作ったっていうことで、多分、大高さん辺りも、もうマークされているんじゃないかと思いますけど、そういうことをやっているっていうことは、いかに先程の中で、お二人がおっしゃったように、これだけ危機的な状況の中にあって、日本って相変わらずお花畑だなぁって思っている次第でございます」
水島「そうですね」
藤「それで本論に入りまして、原油を含めて、そういうエネルギー情勢を見ている人間からすると、本当に先週の前半は肝を冷やしました」
水島「うん」
藤「アメリカもイランに参戦して、週の初めは、もう原油価格が軽く１００ドルを超えると」
水島「うん」
藤「１００以上１３０でいったんですけど、そのあとトランプさんが撃ち方止めと両国、

停戦に合意をした瞬間に、もう週の後半にイスラエルのイラン侵攻前の水準に戻って、何も無かったように、実は推移しております。株価も本当に大井さんがおっしゃったように、２７日に４か月ぶりに最高値を更新して、もうトランプさんの朝令暮改ぶりは全く関係がないかのように株式市場が推移していって、何も無い凪の状況になっているようですけど、まぁ、私は、やっぱり原油を見ている人間からすると、矢野さんの方から中東情勢についての安定化というお話があって、基本的にそのシナリオについて、私は別に批判する資格も何も無いんですけど、私が今後、恐れているのは、やっぱりイランの体制転換です」
水島「うん」
藤「多分、短期的には今、国も乱れていますし、今の現執行部が引き締めに入りますから、そう簡単には起きないと思いますけど、私は素人ですけど、今回、最高指導者のハメネイさんの立ち居振る舞いが、私は本当に問題だったなと思っていまして、自分の命が大事だからと言って、通信手段も無い穴蔵に隠れ込み、出てきた声明は何を言っているか解んない声明を出しているっていうことで、正直言ってイランの国民は失望したんじゃないかと思います」
水島「うん」
藤「ですから、その意味では、私は元々今の執行部、ハメネイさんが最高指導者になってから３５年以上になりますけど、最近、２～３年前のヒジャブの問題で若者が怒り、この１０年以上に渡って制裁で経済がボロボロですから、もし今の執行部を現国民が恐れなくなったら、本当に体制転換が起こるかもしれない。
それで、まぁ、思い起こせば１９７９年の第二次石油危機の時に、イランの今の神権体制が出来て石油危機が起きましたけど、今度、その体制が崩壊すれば、イランの原油生産量っていうのは今、一日あたり３４０万ですから世界の供給量の３％強で、私はイランで体制転換が起これば、これで済まずに隣国のイラクにも波及する恐れがあると思っていますから、そうなりますと、合わせて８００万バレル、多分、そういうことになれば本当に大変だなぁって思っていまして、直ちには起きないと思っていますが、私は今後、そういう視点で中東情勢を見て行きたいなと思っております」
水島「なるほどね。はい」
藤「それから、あと、もう一つ、国際情勢を語る上で、やっぱり大国の経済状況を押さえて、これで取り敢えず終わりにしたいと思うんですけど、中国の不動産バブルの崩壊は、もう想像を絶するものだっていうことが判って来ました。ゴールドマンサックスが先週、とんでもなく恐ろしいレポートを出して日経新聞も全くキャリ―していないんですけど、中国っていうのは不動産バブルが真っ盛りの２０１７年に１年あたりの新築住宅販売戸数が２千万戸だったらしいんですけど、不動産バブルが崩壊して２０２５年からの５年間で平均が５００万戸に減るということらしいです」
水島「う～ん」
藤「ピークの四分の一になる。この数字がとんでもない数字だってことをお解り戴く為に一つ例を挙げますと、日本のバブルが崩壊して住宅戸数って中々減らずに９７年をピークに、そのあと落ちて行ったんですが、それでもピーク時の６割を維持していました」
水島「あぁ、なるほどね」
藤「ですからピークの四分の一になるっていうことは、本当に…」
水島「凄いよね」
藤「もうデフレどころか住宅恐慌ですから、先程、冒頭に水島社長から習近平の失脚っていう話がありましたけど」

水島「まぁ、そういう説、説ですね、はい」
藤「えぇ。私が習近平だったら、もう投げ出したい気分じゃないかと。どう考えても中国経済は直らないっていう状況になっています。翻ってアメリカの方も、ちょっと見てみたいんですけど、アメリカは不動産市場が相当、ヤバくなっているということをお話ししたいと思うんですが」
水島「うん」
藤「先程、株式市場が、もう史上最高値になったので、本来、まぁ、アメリカの歴代政権というのは株価を重視しますので…」
水島「うん、やっていましたね」
藤「それ程、トランプ政権が気にする必要が無いのに、ここに来て、またパウエルさん辞めろとか、ＦＲＢは馬鹿じゃないかとかって金利を１％、日本並みにしろと言っているのは、どうも背景にあるのは住宅用不動産の問題が大変みたいですね」
水島「あぁ、そのね」
藤「一例を挙げますとね、アメリカというのは日本と違って、住宅市場に占める中古住宅市場の比率が９割あるんですが、この中古の住宅市場が、もう、とんでもなく大変な状況になっておりまして、先程、原稿を纏めて来たんですけど、実は５月が前年比４％限度、４０３万戸に留まりまして、これが５月としては２００９年以来、最も低い水準でした。更には５月の新築一戸建ての住宅販売戸数が前月期１４％の減の６２万強になりまして、その売れ残った住宅在庫が２００７年後半以来の高さになっています」
水島「う～ん…」
藤「それで住宅着工件数も２０２０年５月以来の５年ぶりの低さです。その原因は、やっぱり住宅ローン金利の高さです」
水島「あぁ…」
藤「住宅ローン金利が７％で推移していますので、とにかく金利を下げなきゃいけない」
水島「う～ん」
藤「ご案内の通りＦＲＢは、短期の金利しか市場操作できませんから、直ちに利下げをしても住宅ローン金利が下がる訳ではないんですが、それでも一定の影響力があると」
水島「あるよねぇ」
藤「ですから下げてくれっていうことです。最後に、もう一つ、前から問題になっています商業不動産市場も益々おかしくなってきていまして、不良債権は増え、今年の後半から来年にかけて債務の満期が到来しますから」
水島「なるほど」
藤「本当に大変なことになってしまう。ですから住宅市場、不動産市場をつくる為には、やっぱり金利を下げなきゃいけない。ですから最近、トランプさんを始め、最近ではベッセント（Scott Bessent）さんも、それに同調していますし、それからラドニック（Paul Rudnick）さんに至ったら、もう露骨な恫喝をかけている」
水島「うん」
藤「多分、そういうところに危機意識がある。ただＦＲＢからしますと、これは中央銀行の性ですけど、中央銀行の使命はインフレの抑制と雇用の拡大です」
水島「うん」
藤「ですから住宅バブルが崩壊するから金利を下げろっていうことには答えられません。ですから引き続き格闘が続くんですけど、格闘が続けば続く程、ＦＲＢ自身の信認が失墜します」
水島「う～ん」

藤「ですからアメリカもおかしくなる。まぁ、国際情勢についての見識は無いんですけど、これから今年の後半、来年にかけて中国もアメリカも多分、経済が相当、ヤバイ状況になっていくのであって、まず日本は、そもそも輸出が出来なくなるし、国内も中々伸びて行かない中にあって、ジリ貧状態が続く」
水島「そうだね」
藤「しかも、お二人がご指摘されている通り、もしかしたら、これまでに無かったような危機も来るかもしれない。その中にあって、今の日本の言論状況は果たして大丈夫なのかっていうのは、全くお二人と同感でございます。以上です」
水島「その通りですね。はい。今、具体的に話して貰ったんですけど、１％下げるとかね、こういったこと自体、アメリカの財政赤字というのにも関わって来るよね」
藤「勿論、そうです」
水島「だから、それで必死になっているんだろうけども（苦笑）、う～ん、まぁ、この辺は、また、外交って言ってもトランプにとっては多分、その問題が凄く大きいよね」
藤「はい。やはり直近は、とにかく財政赤字が増えているから日本みたいに金利を下げれば、あれだけ国債が多くても利払いが少なくていいだろうっていうことをトランプさんは言い出していますけど、私の勝手な想像は、やっぱり住宅市場。アメリカもＧＤＰの１５～６％が住宅市場で成り立っていますから、これが悪くなったら、まさしくリセッションですので多分、その懸念も大きいのかなと思っています」
水島「なるほどね。それは大きいですねぇ」
藤「はい」
水島「はい。有難うございます。では、大高さん、お願いします」
大高「せっかく、藤さんが『地球温暖化の嘘』という本を出して下さってるのに、未だにＧＸ１５０兆円、官民あげて投入、岸田政権の悪しき置き土産」
水島「うん」
大高「これ、見直しされないです」
藤「する訳ないじゃないですか」
大高「おかしい。１５０兆ですよ」
水島「だから、全部、金が絡んでいるから」
大高「う～ん」
水島「まぁ、やめられないんでしょうね」
大高「だって、あんな太陽光パネルで日本中が本当に環境汚染もされますし、問題だと思うんですけれども、もう一つ、日本って本当に不思議な国だなぁと思うのが、これだけイランとイスラエルで核を焦点にしての戦争になったのに、何故、核武装の議論すら、提言する政治家が居ないのかっていうことですね。本当に不思議でならないですね。
あと、気になったのは、やっぱり、国際社会は何故、イスラエルのダブルスタンダードに声を上げないのかということですよね。お金の流れで言えば、まぁ、あれですよ。
私、１０月７日の、あのハマスのテロ、やっぱり、あの時に、私は今も気になっているんですけれども、テルアビブの証券取引所で株の空売りがあって、イスラエル側が事前に、この情報を知っていたのではないかというのは、確かアメリカの大学教授がされたんですよね。私もそれを読んで１０月７日の真相というものが、ずっと気になっているんです。
今回のイランへの核攻撃にしても、じゃあ、何故、イスラエルはＮＰＴ、核の査察を受け入れないのかとか、核不拡散条約とか一切、無視して、どうして無視している国がイランにだけ強圧的、強硬的な行動を起こせるのか。そして国際社会は、それを容認するのか、凄く不思議で、じゃあ、そんなネタニヤフ首相が、これは善と悪の闘いだって言った時に

アメリカの世論も世界も凄くシラケたんですよ」
水島「うん」
大高「またか、もう、その手には乗らないぞと。もう９１１の同時多発テロとか湾岸戦争とかでは上手く国際世論を巻き込み、多国籍軍対イラクとか出来たけど、もう、みんな、シラケているんですよ。それなのに世論は、やっぱりイスラエルに苦言を呈するというのは未だ難しい。そんなにアメリカ人だってねぇ、もう中東戦争なんかには駆り出されない、内向きで、もう出るのをやめようと言った軍人さんも居たじゃないですか。自分達の軍隊はイスラエルのアーミーじゃないと言ってクビになったのかは、ちょっと判りませんけども、そういった声も、いっぱい出て来ている。よっぽどユダヤ・ロビィっていうのは強烈な強さを持っているのかなと思って、お金の流れを調べたんですよ」
水島「強いですね」
大高「ユダヤ系の団体がいくつかアメリカにあるけれども、議員とかにロビィ活動しているお金と湾岸諸国、サウジとかカタールとか彼らが出しているお金を比べたら、湾岸の方が多いんですよ。だからトランプさんは喜んで湾岸へ行って、イスラエルには寄らないで、まぁ、色んな戦略があったと思うんですけども。そうすると、お金の流れだけじゃない何かがあるのかなぁと思っています。
やっぱり気にはなっているのは、エプスタインなどのブラックメールとかですね。本当に、その根幹に関わる情報を握られていて、メディアにしても政治家にしても声をあげたくてもあげられない事情があるのかなと。だから、そこに振り回されていたら、本当に世界中がおかしくなるので、そういうのはいかがなものかと思いました」
水島「なるほどねぇ。今、イスラエルの一昨日ぐらいかな、ハアレツっていう反政府系というかね」
大高「はい。所謂、左派ですね」
水島「あのイランの爆撃は完全に間違いだったという、今、藤さんが言ってくれたイラン人を、今言った藤さんのような状態だったのに、イランという国で纏めさせちゃったと」
藤「うん。もしかしたらね」
水島「これはイスラエルにとっては一番、拙い、バラバラで体制転換、狙っていたはずなのに、逆にイランっていう国で、国とか民族としてペルシャ人として纏めちゃったと」
藤「そうですね」
水島「だから逆に藪蛇だったっていうねぇ、それを、そのハアレツっていうイスラエルのメディア、反対派の方ですけど、ネタニヤフは直ぐ辞めるべきだと。色々なことを表立って報道しているからねぇ、やっぱり、これも、そういうのがあるのと、もう一つ、今、言ってくれたこと、前に大高さんとも話したことで、やはり今回は核施設に、バンカーバスターを落としたっていうことは、核攻撃ですよ。本当は原子力発電所にボンっとやって、爆発したとかメルトダウンだ何だって言ったら大変な被害が、実際、さっき言ったように、その説だと思うんだけど、そういうことをやったのと、もう一つは、あまり報道されていないけど、ウクライナがロシアの核戦略基地、爆撃機に対してね…」
藤「やりましたね」
水島「ね。あんな離れたイルクーツクという所で撃ったということは、ロシアとしては、核攻撃を受けたんだから即ウクライナへ戦術核を落としたって全然、おかしくないですよ。こういうようなことが全然、言われていないというかねぇ。今、大高さんが言ったように、隠されているっていうかね。
もう一つ、私が、よく引用するドゥーギンというロシア人が言っているんだけど、やっぱりトランプは、そこに踏み出しちゃった。一応、停戦は具体的には正式に止めたけども、

現実的には戦術核の使用という核戦争、トランプがパンドラの箱を開けてしまったと」
藤「うん」
水島「ここのところの矛盾ですね。停戦の為だったら、核戦争も止むを得ないという。これは広島、長崎と同じ論理で、彼は同じことを言っている訳です。平和の為だったら、こういうのは仕方がないっていう、だから矢野さんが、さっき言っていた様に、私も、この間、番組で言ったんですけど、イスラエルがこうなら、イランもサウジもトルコも核武装すべきだ。これをやらないともう駄目だ、収まらないっていうかね、矢野さんがさっき言ったように、持っているか持っていないか判らない戦術でやるとは思うけども、そのぐらい、厳しい状態が続いているっていうことも、我々に対して使われ始めているよって、第三次世界大戦がもう始まっていると、ドゥーギンなんかが言っているけど、そこまで言うかどうかは別として、ただトランプは、大きなパンドラの箱を開けてしまった。一時的な停戦だけでは済まない状態になった。いずれにしても、さっき矢野さんが言ったようにイランは核武装するでしょう」
矢野「間違いない」
水島「どんなことがあったってするし…」
矢野「もう固めてしまった」
水島「ねぇ。決意を決めちゃったっていうね。こういう事の結果、今の場合はいいとしてもということですけど、宇山さん、この辺もね、お話をお願いします」
宇山「私は６月２２日のアメリカによるイランの核施設攻撃を、どう評価するのかっていうのは中々難しい分析とか評価があると思いますね」
水島「うん」
宇山「確かに国際的に、国際法から見ても道義的に見ても、この作戦っていうのは許されないことではあるんですけれども、北朝鮮を結局、非核化することは出来なかったという教訓に照らせば、こういうやり方しか方法が無かったのかなと。話し合いで済めばいいですよ。しかし、実際には話し合いで済まなかった訳です。５回か６回に分けてオマーンで、この間までアメリカとイランが、ずっと核協議をしていたけれども結局、全く動かなかった訳です。
そうすると、もう爆弾を落とすしか方法が無いだろうというように考えるのも、一つ合理的な方法かなとも思います。そして、この作戦が、実際に核施設を破壊できたかどうかということは別として、それなりに緻密な作戦であったということも評価することが出来ると思うんです。
ただ、この評価については、専門家の意見が様々に分かれております。どう分かれているかと言う点を、ちょっと整理してみました」
水島「はい」
宇山「大きく二つの見解がある訳です。核施設の中枢部を破壊出来なかったという見解と、中枢部を破壊できたという見解です。トランプ政権の近くの人達は、中枢部を破壊できたと言っているんですが、しかし、ＩＡＥＡの事務局長等は、実は破壊出来ておらないと、イランは数か月で、この核開発を再開することが出来るというようにも言っている訳です。
じゃあ、そうすると、①のところですけど、核施設の中枢部を破壊できなかったとして、態としなかったのか、それとも能力的に出来なかったのか、どっちなんだというところが問われなければならんと思うんですね。
まず、このａの部分です。わざとしなかったとするならば、イスラエルの暴走を牽制することが出来るかどうかというところが問われなければなりません。先程、大井さんもおっ

しゃられたように、八百長説ですね。
実はイランのバンカーバスターを起こす際、アメリカはイランにちゃんと事前通知をしている訳です。そしてイランがアメリカに反撃する時、カタールの空軍基地にミサイルを撃ちますよということの事前通知もしている訳です。アメリカもイランも互いに事前通知をしていると。これを、どう捉えるかというところから、八百長説、プロレス説というのが流れているんだろうと思います。何の為にそんなことをするのかと。それはイスラエルの暴走を牽制する為だと。
トランプ大統領からすれば、俺達はお前達の為に、ここまでのことをやったんだと。もうお前達もこれでいいだろう、引き下がれということで、抑えたという説も成り立つんだろうと思います。そして、もう一つは、能力的に出来なかったということも、同時に考えなければならんと思うんですよね」
水島「うん」
宇山「バンカーバスターは火力が非常に強くて、地下８０メートルまで到達できると言われていますが、実際、イランの核施設の中枢部は８０メートル以上、潜っているということも言われている訳です。そういうことで破壊出来なかったという可能性があるならば、先程、矢野先生がおっしゃるように、イランの核武装がとめることが出来ないと。イランの核武装というのが今後、加速化して来るという可能性もよく考えて行かなければならんと思います。
私は個人的に②の核施設の中枢部を破壊できたという可能性は、少ないのではないかと思います。トランプ大統領が言うように、今後、数十年、イランは核の再開発が出来んぞという風に言っておりますが、その可能性というのは著しく低いと思います。
そして、もう一つ、私達が考えなければならんのは、６月１３日にライジング・ライオン作戦という、イスラエルがイランを空爆したという作戦があった訳です。６月の２２日にバンカーバスターを落としたという、ミッドナイト・ハンマー作戦ですね。この二つの作戦は、どういう関係にあるのかという点も考えなければいかんと思います。
まず、この二つの作戦。元々一体のものであるという見解があるんです。①です。しかし、テレビのコメンテーターの多く、専門家の多くが言っているのは、②の方ですね。これは元々一体のものじゃなくて、アメリカが追随して攻撃をしたんだと。イスラエルの空爆攻撃が、あまりにも上手く行き過ぎたので、トランプ大統領はこれならいけると言って、功を焦り、あとから追随したんだと。元々あった作戦ではないという言い方を、テレビのコメンテーターの多くがしております。本当にそうなのかなんですが、①と②、どちらかということを検証する上で考えてみたいのは、実は、これにウクライナの動きが大きく関連しているというように思うんですよ。
実は、このイスラエルが６月１３日にイランの空爆をした時に、ドローンを大量に使っている訳です。そのドローンは何処からやって来ているかと言うと、これがウクライナから技術供与され、ウクライナから提供されたものだという訳ですね。つまりウクライナは、このイスラエルのイランの攻撃というのは事前にあるっていうことを判って、事前に支援をしていたということが言えるんだろうと私は思います。
そういう点ではウクライナ、アメリカ、イスラエル全員が、この三者一体で６月１３日のライジング・ライオン作戦を理解して知っていたと捉えるのが、順当だろうと思います。どうしてウクライナがイスラエルを支援しなければならない理由があるのかという点ですけれども、これによってイランが戦争に巻き込まれると、戦禍が大きくなるということになれば、ロシアが介入をしてくるという可能性が高まって来る訳です。
ロシアが中東にリソースを割かれるというようなことになれば、ウクライナ戦争に於い

て、ウクライナが優位に戦いを進めることができるという目算があったのではないかという点と、もう一つはウクライナがアメリカの歓心を買う為に、このようにイスラエルに対してドローンを供与したということが考えられます。
実は昨年末のシリアのアサド政権の崩壊の時にも、反アサド・グループにウクライナは大量のドローンを提供しているんです。それによって、ロシアをシリアの紛争に引き摺り込みたいという思惑があったと思います。しかし、プーチン大統領は実際、このシリアの紛争には関わらなかったんですが、そういうことがあればいいなという点で、ウクライナが中東紛争に積極的に関わっているという事実も見れば、やはりイスラエル、ウクライナ、アメリカというところが一心同体ではないかなという様に思うんです。
しかし一方で冒頭、申し上げたように、実はイランとアメリカ共に内通していると。お互いに事前通知などをして、徹底的にやり合わないように抑制を利かせているという部分もあるんですね。そこが私は、トランプ大統領の絶妙な戦略家の一つだろうと思います。こうしたことを総合した上で、今後、この停戦というのがどうなるか。
中東っていうのが、どうなるのかということを原点として分析をしていかなければならんと思いますし、また、この日本がどうするかという点についても、あとで、ご説明申し上げたいと思います。以上です」
水島「なるほどね。その辺、非常に検討してみる価値のあるところですよね」
宇山「はい」
水島「やっぱりトランプのやり方っていうのが、共通するところはネタニヤフを何処までやらせるか。これは、ちょっと自慢で、いつも言うんだけど、１０月７日にハマスが入った時、私はイスラエルが核攻撃まで行くんじゃないかと。だから、やはりイランの核施設の攻撃とか、あぁいうのは全部、事前に国内に全部、置いていたというようなことを考えると、モサドがそんな間抜けなね、千人も入れて、ふぇ～、ビックリしましたぁみたいなことをやる訳がないんでね。それからモサド自体、イスラエルが作った組織とも言えるんでね。今、おっしゃるように…」
大高「ハマスへ？」
水島「うん」
大高「ハマスをイスラエルが…」
水島「そうそう。イスラエルがハマスを創った」
大高「はい」
水島「ＩＳだって実際はアメリカのＣＩＡが創ったって言われている訳ですから。だから、そういう中で、今、宇山さんの言ったどうなるかっていう問題が段々明らかになって来るところがあると思いますけども、やっぱり私から言うと、本当にイスラエルは、そういう計画的にちゃんとやっていると。もう、これは止められないとなって、トランプが、自分がやるということで毒を以て毒を制すみたいなやり方をしたけども、その辺は、実はプーチンとトランプが電話で話している。
そういう一種のやり方をしていたんじゃないかっていうね。このプーチンの要素もあると、私は思っているんですよ。電話会談を１時間半ぐらいしたっていうじゃないですか。このあと、どうするかっていうことでね。イランも引っ込まないし、イスラエルも勿論、引っ込まないでね、おっしゃるように、そういう状態になった時、ウクライナも含めて、こういう形で、もう直きウクライナが片付くと思いますから、ゼレンスキーが排除されるだろうし、もっと言うとネタニヤフも、そういうものがあるんじゃないかっていうね。
今、凄く仲良くお互いに何か褒め合っているけれども、イーロン・マスクを見ると、よく分かるというね。これはトランプの特徴で、もうねぇ、という感じがするところもあるん

ですね。では、モーガンさん、じゃあ、お話を聞かせて下さい」
モーガン「はい、有難うございます。皆様の分析を拝聴して、面白いと思っていて、殆ど同感です。まず参議院選のことですけれども、参議院選が迫っていて、日本国内の政治を二つの次元に分けて考えた方がいいのではないかと考えていて、まず、日常的な政治があるかと思っていて、日常的に言えば、色んな厭な政党があると思いますが、敢えて、そういった日常的政治を見ないで、もう一つの次元で構造的な政治を見て、今回の参議院選を見た方がいいのではないかと考えていて、それは、どういう意味かと言うと、アメリカン・パワーの媒体が自民党です。売国奴の集まりが自民党です。私の唯一の狙いが、自民党をぶっ壊すことです。
その自民党をぶっ壊して、もう全員、逮捕して自民党を壊せば日本の独立が可能になると、私は考えています。そのあと、日常的政治を考えればいいかもしれませんけれども、まず自民党を壊して独立をして、自分の手で日本という国家の舵を切ることが出来るようになる。それが私からすれば急務です。この参議院選で戦略的に考えれば、他の党はどうでもいいですから、まず自民党をぶっ壊して、あの党が無くなればアメリカン・パワーの媒体が無くなる訳です。
日本人が独立して自ら自分の国の方向性を決めることが出来る訳ですし、最近、例えば産経新聞とか国基研とか、そういったところのメディアを見て、未だに国基研の奴らとか、産経新聞の人々とか自民党の人々がアメリカと同じ価値観を共有しているとか、もしも、ホルムズ海峡で何か問題があれば自衛隊がそこに居なければ日本が叱られるみたいな発言が、あの兼原っていう代表的な拝米保守、そういった人々が未だに何も解っていないっていうか、アメリカからお金を貰って態と嘘をついている人も居る可能性があると思います。
まず、それが一つの国内の急務です。それでイランの件ですけれども、私から考えれば、トランプの狙いはアメリカ国内のネオコンの抑止が多分一つの狙いではないか。もっとイランで本格的な戦争がしたい奴は、いっぱい居る訳で、じゃあ、空爆してやったから、それで満足しろといった考えもあったのではないかと。
私の考えでは、バンカーバスターを使って、態とバンカーバスターは、イランの核施設を破壊する能力が無いからこそ、そのパフォーマンスをしたのではないかという、要するにバンカーバスターという神話があるじゃないですか。その神話を守る為に、トランプらしく歌舞伎をやった訳です。バンカーバスターっていう歌舞伎を披露してやりましたぜって大きく嘘をついて、でもアメリカのスパイ達から情報漏れが二つあったじゃないですか」
水島「うん」
モーガン「出来ていないよって。破壊していないんじゃないかと。それは多分、本当ではないかと思っています。あと、もう一つの狙いは、イスラエルを抑止することです。あのイスラエルも本格的にイランで戦争がしたいと思っていて、トランプの側近はレジーム・チェンジがしたいと最近、言っていて、それが、もしかしたらトランプは空爆をやって自然的にイラン国民に任せて、じゃあ、お前達がレジーム・チェンジをやってくれといった狙いがあるのではないか。
あとイスラエルを抑止すると同時に、イスラエルを守る為にイスラエルの撃沈能力が今回、イランのミサイルに比べると、イランのミサイルの方が有力なのでないかっていう分析があって、あと、矢野先生の分析を是非、拝聴したいんですが、イスラエルっていう国は、破壊された建物とかの映像をアップすることが禁止されているようです。相当、破壊を受けている様です。私が聞いている情報によれば、イスラエルっていう国は、やっぱり自分達の誤解というか誤算でイランっていう大国に戦争を売って、そのやり返しが来れ

ば、やっぱり耐えられなかった。トランプが横から入って、助け舟を出して空爆しましたと。
あと、二つの狙いがあったのではないか。一つ目は中国が前から企画している一帯一路、その非常に重要な所のど真ん中、一帯一路の重要な道のど真ん中でイランで戦争が起きたら、中国を混乱させることも出来ると考えているのではないかと。一帯一路を一つ防ぐことが出来る。もうロシアに近い所ですので、ロシアの包囲線にも貢献できる所です。
もう一つの問題です。私がトランプに一番、期待していたのはアメリカのディープステイト、アメリカ帝国を、もしかしたら解体してくれるのではないかと思って支持していましたが、蓋を開けてみれば真逆な事ばかりやっていて、米帝国を保護する為に軍隊の腕力を全世界に見せたかったんじゃないかと思っていて、それがイランの歌舞伎の内容ではないかと思っています。
日本国内では他の先生方も、そうおっしゃっていますけど、そういった現実に目を向ける政治家は、ほぼ居ないです。自民党はゼロ人です。先程、メディアは、この話があったんですが、国分太一さんとか、また芸能人の話で大騒ぎ。前もそうだったじゃないですか。あのＳＭＡＰの人とか、どうでもいいことばかりが報道されていて、また国民の目を逸らせて、本当に世界が激変している中、また芸能人ニュースが中心的になって、またかよ、と思って。
それでウクライナ。あのウクライナはテロ国家です。１０年以上前からウクライナは自分の国民、ドンバスの国民を砲撃していて、ウクライナってタリバンと、ほぼ変わらない。今になってみると、ウクライナに比べてタリバンの方がマシです。日本国内では未だにウクライナを支援しましょうとか、民主主義の為とか馬鹿みたい。あのテロ国家を未だに支持したいと思っている人は、頭がおかしいですよ。それかウクライナからお金を貰っている訳です。
今、宇山先生がおっしゃったイスラエル、ウクライナ、アメリカが３人チームを組んで、イランで嫌なことをやった可能性が充分にある。最後です。先程、他の先生方がおっしゃいましたけれども、ロシアの核戦略基地にドローン攻撃したことは、核戦争でも起こしたいんですかと」
水島「そうです。戦争をやりたいんでしょうね」
モーガン「非常に無責任極まりないことをやったウクライナが、ＭＩ６の情報とかＣＩＡの情報を得ないで出来るはずがない。人工衛星の映像とかはＭＩ６かＣＩＡか、その両方が提供したのではないか。それは、ほぼ確実だと思います。ということは、イギリスがアメリカのポチに過ぎないので、西側がロシアに対して核戦争という火遊びをやっている訳です。ウクライナという手先が傀儡人形、その傀儡政権で、とても嫌な仕事、お使いをしている訳です」
水島「うん」
モーガン「イランでも、あのバンカーバスターを使って、それも核戦争の火遊びやっている訳です。私の考えでは、いつも日本国内では誰が中国抑止するとか、中国抑止は米が代理戦争をすることが上手ですから、中国抑止っていうのは、日本人が死ぬ訳で、アメリカの為の中国抑止。私が知りたいのは、誰が米を抑止するか。それが、これから全世界的に見ると、一番、大きな問題は誰がワシントンを抑止するか。
私の大好きなフーシとか、あとイランを応援したいんです。私はイランを応援しています。そういったワシントンを抑止している国々。プーチンを応援しています。これからの世界の平和の為に、ワシントンをぶっ壊さなければならないのが、全世界の急務だと考えています。以上です」

水島「なるほど。はい。今、言ったことは非常に大事なことで、私も、さっき触れたんですけど、トランプはＭＡＧＡというあれから、実際は、もう逸脱したんですよ。バンカーバスターによって」
モーガン「はい」
水島「というようなことも結構、大きな要素ですね」
モーガン「はい、はい」
水島「人の国には、ちょっかいを出さないっていうね」
モーガン「はい」
水島「つまり前のブッシュのイラク戦争と全く同じように、大量破壊兵器があるから、やっつけるんだって言って、行動を執ってしまった」
モーガン「はい」
水島「つまりＭＡＧＡの政策とは違う、ネオコン政策を執り出したっていうこと」
モーガン「そうですよ。もうＭＡＧＡが存在しないと考えていいと。アメリカ・ファーストは未だ存在しているんですけれども、ＭＡＧＡの中からCrazyな福音派クリスチャンが、アメリカはプラス、イスラエル、プラス福音という、とても変な組み合わせで、未だ信じている人が完全にネオコン陣営に入って、ＭＡＧＡって真っ二つに分けられてしまって、私達はアメリカ・ファーストっていうか、もう戦争は嫌だ。そっち派。もうトランプは嫌だ。大嫌いです。あの人に騙されて、私達は馬鹿ですけれども、トランプが戦争したいのであれば、じゃあ、お前は、ただのネオコンに過ぎないと。もう一遍に国内のムードが替わりました」
水島「なるほど。これはね、大変、その通りなんですけどね、ドゥーギンが面白いことを言っているのは、あぁ、これはポストモダンのどっちでもいいみたいな男なんだと。ポストモダンを、よく表して体現している男だと。だから波乗りサーファーだと。波が来る度に、いい波だったらパッと乗って、それで、また別の波が来たらホイと乗ると。これは、ドゥーギンも言っているんですけど、スピードだと。特徴は異常なスピード。５分で決めて５分で直ぐやる。前と全然違うことを言い出すっていうね、だから、もっと言うと、量子的力学だっていうのね。あると言ったらあるし、無いと言ったら無いというね」
藤「(笑)」
水島「もう全くヴェンチューリのポストモダンみたいなね、実はこういうものが始まっていると。トランプは、そういう奴だったんだっていう言い方をしていて、あぁ、なるほどねと。ドゥーギンも、そういう意味では騙されたっていうかね、あれなんだけど、まぁ、中々元に戻り難いだろうみたいなニュアンスはありますけどもね」
モーガン「アメリカ帝国を解体するどころか、トランプが強靭化している訳です。じゃあ誰がアメリカ帝国をぶっ壊してくれるかって、それは大きな課題ですよ。国内問題でもありますし、でも日本からすれば早く独立して…」
水島「本当に世界的な問題ですよね」
モーガン「あのサイコパスの連中から離れて、日本国民が日本国の問題を決めるしかないと私は考えています。この選挙の意味は、正にその通りだと思っています」
水島「はい、まぁ、そのねぇ、この辺の問題は色んな形の考え方があって、非常に面白いと思うんですけど、今のモーガンさんの危機感は、やっぱり、本当にその通りでアメリカの危機でもありますし、私、自分の番組で、はっきり言っているんですけど、多分、世界はみんな戦争をやりたがっているんですよ」
モーガン「そう」
水島「あの連中は」

モーガン「そうですよ」
水島「ヨーロッパやね」
モーガン「日本国内のジェオコン、ジェオコンも戦争をやりたいんですよ」
藤「ジェオコンって言うんですか（笑）」
モーガン「そう、ジェオコン。何処でもいいですよ、台湾とかフィリピンとか、ホルムズ海峡とか、日本国内のジェオコンは相当、大きな問題ですよ」
水島「だから多分、さっき国分太一の話を言いましたけど、結局、何だかんだ何だか分からないままにしていて、さぁ、ドカンッと来たら、どうするっていうね。もう、やらざるを得ないでしょうっていう形になる可能性が凄くあるんじゃないかっていう気がしますから」
モーガン「はい、その通りです」
水島「やっぱり、ここのところを、さっき宇山さんがちゃんと表で出したように、実は、どういう方向でやっているかって言うと、我々日本人が間違っちゃうのは、みんなが平和を求めているって、そう思っている人が多い訳ですよ。結局、みんな、平和を求めているんだと。でも違う。戦争をやりたがっている奴が居る」
藤「確かにねぇ」
水島「これも、最近、ずぅっと読んでいるので、またドゥーギンですけど、あぁ、ドゥーギンじゃない、これは別の人が言っているものです。今、ＡＩを使った世界支配を狙っている連中というのは、実は、人類みんな仲良く生きているとか、そうじゃなくて自分の役に立つ奴だけを残して…」
モーガン「そうです」
藤「うん、そうですね」
水島「もう人間そのもの自体を、もうね、みんな一人一人の大事な命っていうかね、そんなものは全く無い。人口抑制だって必要だったら、みんな、殺しちゃう。病気でも殺す、戦争でも殺すって、こういう人達が今、本当に世界に存在するようになってしまっている。この物凄く恐ろしい現実を、我々は結構、感傷的なっていうかな、センチメンタルな形で、人間みんなが命だと思っているところがあるけれども、そうじゃない連中が今、もう世界に居る訳で、だから戦争を始めたがっている、或いは、今回のエボラ出血熱もそうですけど、色んな形でコントロール出来るような状態のものを考え始めているっていうね。
こういうことも、やっぱり言われ始めているので、ＡＩの問題は凄く恐ろしいですけど、実は、少し言わせて貰うと、文学で２０世紀の時に現実っていうのは一番の問題だったんですよ。どういう風に現実を捉えるか」
藤「う～ん」
水島「ところが最初に出て来たのは、コンピュータとか仮想現実っていうのが出て来た。仮想現実っていうのは、仮想現実で現実があって仮想現実がある。ところが実際には量子力学的に言うと（苦笑）、仮想現実とか言うけど、本当にそうかいと。こっちの現実がね、夢と、夢のまた夢って浪速のことはという、露と落ちって、その本当に現実と仮想現実が区別付かなくなってきている、そこの中に我々が入り込んで来ているっていうね。だから、さっき言ったイデオロギーも何も本当に無力化してきて、最後に残るのは、実は道徳とか変な言い方だけど、こういう人間の生き方とか家族に対する愛という、物凄く馬鹿みたいに聞こえるかも分かんないけれども、そこまで行きつつある世界があるんじゃないかということがありましてね。
だから、その直前で、我々が止められることが出来るかどうか。日本人の意識というの

は、実は伝統の意識は世界観、自然観はそういうところと非常に親和性があって、きちっと生きられるものを提供できるような気がしていたんですけども、今、そういうものが出て来ている。
まぁ、そういうところ迄、実際、今、世界がいき始めているっていうことを踏まえた上で、今言った日本の問題ですけれども、皆さん、これ、まぁ、みんな、馬鹿だとかね、確かにその通りで、危機感のない政治家やこういう人達ばかりだけど、どうですか、コントロールされていると思いますか。ちょっと宇山さんに聞きたいな。今、こういう、まぁ、はっきり言って本当にお馬鹿なね、さっき民放で党首討論をやっていて、全員、ずらり並んでいたけど、本当に、つまんねぇ芝居っていうかねぇ、芝居って言うか何かねぇ、役者として見ても何かねぇ、昔、東映とかが忠臣蔵とかをやると、オールスター総出演みたいになると、それなりに面白かったけど、何だか貧相な石破さん始め、本当に何かねぇ、なんだこれって、何処かの村役場とか市会議員の、悪い市会議員のね」
大高「(笑)」
一同「(笑)」
水島「その役員が集まって、あぁだら、こうだら言っているみたいなねぇ。本当に、そういう人材の貧しさね」
藤「うん…」
水島「これは意識的に、我々がここに来たんだから、むしろ、外国の目線から言えるモーガンさんに、この今の日本の政治とか、そういう状況はね、一つは我々自分達が作って来ている訳ですよ」
モーガン「はい」
水島「いつも言うけど、ロシアは、ユダヤ人が作った１０月革命、共産主義革命をロシア人が自ら克服しているんですよ。今のプーチンのように。それは凄いことで、外国の力を借りずに自分達のロシアの伝統や文化で、今のロシアというのを創って来た」
モーガン「はい」
水島「でも我々はＧＨＱによってスタートされてから８０年、我々の力で今、自分の国の独立性を克服できていないですよね。というのは、これは何だろうっていうね。教育とか洗脳が非常に上手かったっていうのもあるだろうけど、我々の国も非常に国民自体に問題が多かったんじゃないかっていうね、それは明治維新から始まるんじゃないかとか、この間、議論が出たんですね。
モーガンさんから見ると、この現在の体たらくっていうのは、特に外国からの目線っていうのもあると思うので、ちょっと聞きたいなと思ってね」
モーガン「政治家は買い物です」
水島「ん？」
モーガン「政治家は一つの買い物だと思います。卵、納豆、政治家みたいな、カゴに入れて、それでアメリカの場合は色んな国がアメリカ政治家を買い上げていて、タッカー・カールソンが最近、テッド・クルーズというテキサスの政治家と面白いインタビューをしまして、お前はさすがＡＰＥＣ、イスラエルのロビィからお金を貰っているじゃないですか」
大高「３億円、貰って」
モーガン「３億円、貰っていて」
水島「あぁ、見たな、そう、面白いね、あれ」
モーガン「それも面白かった、イラン、空爆はしたいんですけど、イランの人口はって、知らない。イランという国を、さっぱり知らない、でもイスラエルからお金を貰っている

から、お前は結局、アメリカの政治家かイスラエルの政治家か、でも聖書に書いているので…とか口実を言うんですけれども…」
水島「そうそう」
モーガン「それは多分、言い訳に過ぎない。お金が欲しいからって、クリスチャンをふるまってね、アメリカでは、そういった政治家が殆どです。外国とか大きな、まぁ大手会社とか…、日本の場合は何故、みんな、本当に地味かって言うと、もうワンストップ・ショッピングっていうか、みんな、ＣＩＡとかワシントンから、お金を貰っているから、本当に地味な人ばっかりがずらっと並んでいて、特に頑張らなくても、ワシントンが提供してくれる台本を読み上げれば、それなりのキャリアが出来るので競争が無いじゃないですか。
日本国内では、色んなロビィ活動からお金が欲しいからケバケバしくパフォーマンスをしなくても、ワンストップ・ショッピングでコストコみたいに、ワシントンね、殆どの政治家を買い上げているじゃないかと、私はそう思っています。メディアもそうですよ」
水島「うん」
モーガン「もう、この国は、完全に一色って言いますか、ワシントン色一色です」
水島「うん」
モーガン「私の様な人間が反論を上げれば、中国のスパイとかプーチンのスパイとか、この部屋で、あるワシントン特派員に『お前は中国のスパイだ』と言われました」
水島「あぁ、そう」
モーガン「さすがワシントン、産経新聞のワシントンの特派員が、あそこに座って、今、矢野先生が座っていらっしゃる所で、私に向って『お前は中国のスパイみたいだ』とおっしゃって」
水島「中国っていうのは、どうして出るんだろうねぇ」
モーガン「いや、今回は中国のスパイです。私は忙しいみたいで色んな国のスパイだそうです」
水島「なるほど（笑）」
モーガン「でも、そういったレベルでしか考えられない人間は、逆に幸せだなと思って」
一同「（苦笑）」
モーガン「そのような馬鹿は、お金を貰っている事さえ分かっていないじゃないですか」
水島「あぁ～」
藤「だけど、モーガンさん、一つだけ疑問があるんだけど」
モーガン「はい」
藤「何故、地球温暖化を否定したのかなぁ。トランプさんは、あれだけ、もう１８０度、踵を返したのに、何故、その指令は出ないんですか」
モーガン「それはアメリカ帝国の為じゃないか。よく解らないですけども」
藤「じゃあ、未だディープステイトの力が強いっていうことですか」
モーガン「それは地球温暖化の話は国民がもう飽きているじゃない、よく分からないですけど」
藤「でもアメリカで大きな問題になっていますよね」
モーガン「もう私達は無視しています、お笑い草で」
水島「やたらとドゥーギンの話をするけど、ディープステイトが方針転換したっていう意見があるんですよ」
藤「あ、方針転換した」
モーガン「なるほど」

水島「それで何かって言うと、イランとイスラエルの戦争で、実質的にウクライナ戦争は元々民主主義だとかね、自由だ、人権だ、ＬＧＢＴだって。だから、その自由の闘いだっていう、所謂、西洋型の近代主義的なフランス語圏から続く、そういうイデオロギーで嘘をついてやってきた」
モーガン「はい」
水島「でも、今回は、それが殆ど段々バレて、例えば、櫻井さんは、何故、ウクライナを応援するのって、こうなっちゃう訳ですよ。そうなったから今、変わったのは、今度は文明の衝突路線ですよ」
藤「あぁ、ハンティントンですか」
水島「そうそうハンティントンの方、そういうこと」
藤「へぇ～」
水島「つまり方針ね、さすがにディープステイトって頭がいいって言うかね、もう、この古びた近代主義、自由だ、民主だ、これが駄目になったら、今回はイスラエルとイラン、シーア派とユダヤの戦いとかね」
藤「あぁ、ユダヤ教とイスラム教の…」
水島「そう」
藤「運命のあれですか」
水島「そう。そういう戦い方で、いつまで経っても戦争、続けられる。もうディープステイトのね（苦笑）、そういうことで方針転換したとか、このオッサンは、中々すげぇなぁと思ってね、いや、転換、確かに、そのやり方がね、大義名分っていうのが、これからは、もう、そういう民主主義とか、それじゃあ、通用しない。確かだね、これねぇ、戦争の」
藤「あぁ～」
水島「そうすると、そっちのイスラム対、これは、もう、どうしようもない。解決つけられないんじゃないですか」
藤「でもそれ、ちょっと苦し紛れっていう感じがしますけどね」
水島「そうだね」
藤「そこまで追い詰められちゃったって。あと一つ、さっきの国際情勢で一つだけ付け加えたいことがあって」
水島「うん」
藤「実は重要なプレイヤーを皆さんが、ご指摘にならなかったのでね」
水島「うん」
藤「私は、やっぱりイギリスの影があると思っているんですよ」
水島「そうです」
藤「それで、あのう…」
水島「そうなんです」
藤「先程、宇山さんがイスラエル／イランの戦争にウクライナが関与したっていう話があるんですけど、前に社長がゼレンスキーの警護ってＭＩ６がやっているっていう話がありましたでしょ」
水島「そうなんだよ」
モーガン「（頷く）」
藤「今ウクライナって多分、アメリカよりもイギリスに頼っている訳じゃないですか」
水島「いや、全くそうですよ」
藤「しかもイギリスは今、やっぱり１９世紀、２０世紀のグレート・ゲームをやっている訳だから」

水島「うんうん」
藤「とにかくロシアの国を何としても抑えたいと」
水島「うん」
藤「だから結果は成功しませんでしたけど、ロシアはやっぱり中東地域に引き摺り込もうとして出来なかったと。それから、もう一点をお話ししますと、さっきのイランのレジーム・チェンジですけど、これは未だ日本で報道されていませんけど、実は月曜日にイギリスの議員が追放されたパーレビ国王の長男を呼んでいるんですよ」
大井「うん」
水島「あぁ、そうでしたね。はいはい」
藤「だから、そういうことでレジーム・チェンジを今、一番、考えているのはイランで、それで、なんでかなぁと思ったんですけど、やっぱりイランが色んな国有化をして、またクーデターが出て、またパーレビが戻って、再度、またイラン革命が起きましたけど、一番、初めに中東の利権を国有化されたのって、実はイギリスですよ」
水島「うん」
藤「イランの」
水島「うん、うんうん」
藤「それ以来、イランはイギリスにとって憎いんですよね。利権を奪われた」
水島「はい、そうでしょうね」
藤「レジーム・チェンジして、また国際的に開放して利権に乗り換えることを考えると、やっぱり今は力が衰えたとは言え、外交安全保障、諜報の部分ではアメリカでも数倍上のイギリスが結構、暗躍していて」
水島「いや、全く、もう…」
藤「多分、コンプレイヤーをどう思うかというのを注目した方がいいかなと思いました」
水島「いやいや、おっしゃる通り、その通りでねぇ」
藤「うん」
水島「私は別の自分の番組で言ったのはＭＩ６とモサドと、もっと言えばＣＩＡまで組んでね」
藤「いや、凄く仲が良いんでしょ」
水島「はい。それで国境を越えて、連合体でイスラエル戦争とかウクライナ。だから何故、ウクライナがっていうのをね、何故、イスラエルまで来るんだって、繋がっているから」
藤「うん」
水島「というようなことをね、今、その諜報機関自体があれじゃないですか、それでモサドがね、いつでもハメネイは殺せると言っていたのは、いつでもトランプ、お前も殺せるぞというね、もうＭＩ６とモサドとＣＩＡが仲良く手を繋いでやれば、本当に世界中が震え上がったと思いますよ」
藤「だから、さっきの大高さんの質問に対する答は多分、それですよね」
水島「うん」
藤「いつでも、お前を殺せるぞと。ネタニヤフとトランプさんが仲悪くなった時に、変なあれが出ましたよね。もっとトランプと対立したＦＢＩ長官か何か変な怪しげな８９６６とか…」
水島「うん、情報を」
藤「数字で暗殺を何か鼓舞するようなあれが出ているって」
水島「そういうのがあったとかね」

藤「えぇ。あれは多分、イスラエルの一連の脅かしかなと勝手に勘繰ってましたけど」
水島「脅かしだと思っていますよ。はい。はい、宇山さん、どうぞ」
宇山「今、おっしゃるようにＭＩ６の影がイスラエルの中にもあるし、ウクライナにもあるというのは、私は同意致します。それからイランの体制転換をイスラエルが狙っているということが言われる訳ですけれどもね、私は昨年の丁度、今の時期にイランに居た訳です」
水島「うん」
宇山「そして、このイランの人々に対して、今のハメネイ体制を、イラン、イスラム体制をどう思うかということをインタビューして周った訳です。まぁ、誰一人としてですね、このイラン、イスラム体制がいいんだと言っているような人は居ませんでした。
まぁ、言葉を濁しながら、直接、体制の批判をすると、何処から宗教警察が飛んで来るのか判りませんから。囁く様に大きな声では言えんけど、もう酷いよねと。今の経済制裁で、俺達の暮らしが成り立たない、苦しめられているのも今の体制のせいだよね、何とかして欲しいということを、皆さん、おっしゃっておりました。
私が夜、ホテルに帰る時に、すれ違いざまにインテリ風の大学生のイラン人の学生とすれ違って、向こうが私に声をかけて来たんですね。お前は日本人かと言って、声をかけてきて、そこで色々立ち話をして政治の話をしたんですけれども、最後に、その彼が私に言ったのは、ちょっと悪いけれども少しお金を恵んで欲しいと。自分は空腹に耐えかねているんだと、少しでいいから５ドルでも１０ドルでも構わないからお金を下さいという風に私に懇願をした訳ですね。私は政治の話を彼から色々聞いて貰ったので、それで、私は、１５００円か２０００円か、そのぐらいをお渡ししたと思います。そのぐらい若い人達が困窮をしているというのが、このイランの現状でした。
一方で私はイラン人の皆さんに質問した訳です。アメリカをどう思うかという質問をするとですね…」
水島「うん」
藤「好きでしょ」
宇山「いやいやアメリカに対しては、もう激怒する人が多いですよ」
水島「あぁ」
宇山「あいつらは、けしからんというようなことで、何故、自分達は何もアメリカにしたことがないのに、俺達は一体、何をしたと言うんだと、それなのに何故、アメリカは俺達を攻撃して酷い目に、苦しい目に遭わせるんだと。あいつらは一体、何なんだと言うように、アメリカに対する憎悪というのは、皆さん、口を滑らかに言われるという状況です。じゃあ、そうしたら、そのアメリカと一戦をするかと言われれば、誰もそんな気概を持っている人はおりません。やっぱり自分の生活、自分の家族が皆さん、大切というところの中で、しっかりと今の体制を支えて、アメリカと一戦というような、そんな気概も無い訳です」
水島「うん」
宇山「だからと言ってハメイニ体制を支持、支援をするという気概も無い訳です」
水島「あぁ、なるほどね」
宇山「そして軍の人々や公務員や警察というのは、今の体制の中で飼われているような人達ですから、この人達は体制が崩壊するというのは非常に困るんですよ」
水島「うん」
宇山「だから、この体制をしっかりと守っているという点では、いかにアメリカやイスラエル、或いはイギリスが、この体制転換を画策しようとも、簡単に体制転換っていうのは

出来ないと」
水島「そうですね」
宇山「ハメネイさんを斬首作戦で殺したとしても…」
水島「そうしたら団結しちゃうかも分かんないね」
宇山「えぇ。新たなアイルトゥーラが出て来て、その高位聖職者の中から最高指導者が選ばれるだけであって、斬首作戦ということは、私は、これは通用しないというように思うんです」
水島「なるほどね」
宇山「それから一つ、じゃあ、日本はどうするかという話も是非、させて戴きたいんですけども、石破総理は、イスラエルがイランを攻撃した時に、けしからんと。この他国を一方的に攻撃するのは駄目だという言い方を直ぐに石破総理はした訳です。じゃあ、その調子でアメリカがバンカーバスターで攻撃した時にも、けしからんと言うかと思えばですね…」
一同「(苦笑)」
宇山「それは言わない訳ですね。いや、アメリカはイランの核武装を阻止しようとしたものと認められると。理解をしているという言い方で主旨を変えていますから」
藤「その前、Ｇ７でも主旨を変えましたよね」
宇山「主旨を変えてますから、もう逃げた訳ですよ。私は、こうするしか方法が無いだろうと思います」
水島「うん」
宇山「やはり中東諸国、イランから直接、原油は入れていませんけれども、中東諸国から入れているという観点から、きつい事は総理としては言えないという部分があって、よく似非保守達は、こういうものの言い方をするんですね。今、アメリカは、この伝家の宝刀を抜いている時に黙っておる場合かと」
水島「うん」
宇山「日本もアメリカを支持すると強く言えということを言うんだけれども、この発想というのは、私はこういうことだろうと思います。いざ極東アジアで有事が起こった時に、アメリカ様に助けて貰わなきゃいけないんだと。日本がアメリカ様を支援するのは当然だろうという理屈から来る話だろうと思うんですね。これこそ正に従米思想であって、私はそういうことではなくて、日本が核武装もし、この軍事力も強くしていく中で、そういう時にはアメリカに支持をするということを強く言わなくたって済む訳です。私は、石破を全く支持はしませんけれども、石破は今、アメリカに対して支持ということを言っていないという、この点で評価は出来ますが、しかし、いずれ、支持ということを言わされるんだろうなと思います。そういうことを言わされないようにする為にも、日本が自立をするということは必要だろうと思いますね」
水島「でも、実際、その話は大事な話で、我々が、もし核武装するとしたら、中国、または北朝鮮、何だったらロシアでもいいけども、あの敵国条項野郎が勝手に核武装して危険だと」
宇山「はい」
水島「だからトランプがやったように、東アジアの平和を守る為に日本の原発や色んな所を空爆しなきゃいけないと。広島と同じことを論理で言われますよ、今、おっしゃったようにね。そういうことを自分が認めちゃうっていうね、だから、おかしいっていうことを、おかしいって言わないと、やっぱり他国に対して、爆撃とかね、理由も無しって言ったって核武装するとかしないとか、そんなの勝手だろうっていうねぇ、やっぱり、私は、

その原則論っていうか現実論としても日本の核武装を将来、考えた時、あのトランプを支持しちゃいけないと思いますよ。はい、モーガンさん、どうぞ」
モーガン「あ、横からごめんなさい。今、思い出したんですけれども、トランプが確かにイランの空爆を正当化しようとして、広島と長崎と同じに並べて、そのタイミングで日本の政治家が抗議論を何も言わないでしょ。せめてそこを突っ込んで欲しいです。ちょっと待ったと」
水島「うん」
モーガン「まぁ、せめて言えるのは、お前が今、言ったことは非常に失礼だと。せめて、そう言って欲しい。でも何も言わない。確かに何も言わないと思います」
水島「うん」
モーガン「然程です。然程です」
水島「いや、本当に…」
モーガン「本当に情けないです」
水島「せめて一緒にするんじゃないよっていうことぐらいは言ってもねぇ」
藤「あれは情けなかった」
水島「ねぇ」
モーガン「本当に情けない」
水島「うん。一人も居なかったですからね」
モーガン「私が知っている限り、一人も居ないと」
水島「抗議したのは、あの広島の原爆の被団協の人だけでしょ。今言ったように、本当に具体的な問題で、我々が問われているのは、何処かの国が核武装して危ない国になったらね、イスラエルでもアメリカでも、自由にそこの国を爆撃したり殺してもいいというねぇ、これが今、イスラエルがやっていることですからね。
それからアメリカもやってしまったことは、それですから、我々は本当に敵国条項じゃないですか。いつでも中国だってロシアだって出来るんですよ。そういうことを踏まえた上で反応して貰わないと、だから石破さんは、そこだけ考えてくれて黙っているのか分かんないけども、そんな根性は無いと思うけどね（失笑）。
どうしていいか判んねぇだけだと思いますけど。本当にそういう風に、東アジアに繋がって来るじゃないですか。我々の将来のね。だから、そういう問題で考えなきゃいけないけど、大井さんは今迄、ずっと、特にイランとか、あっちの方、イランとイスラエルになっちゃいましたけど、これね、もう一つ、やっぱり、さっき、私が言ったんだけどプーチンも、これに絡んでいると思っているんですよ」
大井「はい」
水島「さっき言った舞台のね、大舞台で、どういう配置するかとかね、結局、アメリカとロシアが共通的に得をする、そして中東の状態が良くなるというような状態で、基本的に考えると、イスラエルの暴走を抑えなきゃいけないっていうのはあると思いますねぇ。
あと、基本的には石油、天然ガスの場所ですから、どういう感じだと思いますか。どういう感じになればね、ここら辺がトランプとプーチンは何を話し合ったんだろうっていうのがね。或いはネタニヤフとハメネイじゃないっていうこと、いや、実際は、ごめんなさいね、途中で今、あれだけど、革命防衛隊、実は、トランプは昔、イラクで司令官を殺しているんですよ」
藤「あぁ、そうですね」
水島「だから、さっき言ったように革命防衛隊自体が色んな諜報機関が入っているっていうね、必ずしもハメネイ体制、イラン軍、国軍とは違うっていうのも実際に言われてい

て、非常に複雑で解り難いんですけれども、こういう状態の中で強引に聞くとね…」
藤「私は原因について思っているんですけど、結構、ＯＰＥＣプラスは今回の戦争、誤算だったと思っている訳ですよ」
水島「誤算」
藤「というのは、結果的に、これでイランから原油が出て来なくなると思っていて、これまで、この５月、６月、７月と結構、増産したんですよね」
水島「うん」
藤「実際、増産量は思った程、多くなかったんですけど、逆に、今、マーケットで言われているのは、イスラエルとの戦争を始まって以降、イランが物凄い勢いで原油の輸出を始めちゃったんですよ」
水島「うん」
藤「ホルムズ海峡が封鎖される前に」
水島「あぁ～あぁ、あぁ、あぁ」
藤「トランプさんは今も逆に、何かディールの一環で制裁緩和するぞぉって言っていますよね」
水島「うんうん」
藤「ある意味で、これは非常に誤算だったんですよ」
水島「あぁ、なるほどね。そういう風に考えられるね」
藤「うん、だから正直言うと、むしろ、このイランが、これで国際的に孤立する。だから、その分、少し原油を供給しても実は大丈夫だろうっていう感じでやっちゃうと思うんです」
水島「うん」
藤「それが思いの他、トランプさんが結構、早く変わっちゃったもんですから」
水島「うん」
藤「トランプさん関係の外交について、モーガンさんから非常に厳しいご指摘が色々ありましたけど、私は正直言って今回のイランの攻撃でも、実は基本的に彼の外交姿勢は変わっていないと思っているんです」
水島「うん」
藤「だから、それは支持者が理解するかどうかは別として、トランプさんは外交政策でもＴＡＣＯだって言われているらしいんですよね」
一同「(笑)」
水島「たこ？」
藤・大井「『Trump Always Chickens out』
大高「そう」
水島「うん、なるほど」
藤「欧州の国際問題評議会のアナリストなんか面白い分析していまして、トランプさんが一期目、二期目以降で通算２２回、敵対国にとんでもない恫喝をしているらしいですよ」
水島「うん。うんうん」
藤「その内、本当にブロック攻撃したのは二カ国だけと。その二カ国の詳細は、私、覚えていないですけど、とんでもなく弱い国で、いくら、ぶっ叩いても絶対に歯向かって来ない国だったらしいです。もしくはテロリスト・グループ」
水島「あぁ」
藤「だから、今回、彼の判断はともかくとして、さっき、おっしゃっていたイスラエルの攻撃が１週間で、あまりにも上手くいっちゃったもんですから多分、トランプさんの共有

認識が変わってバンカーバスターをやったんじゃないかと」
水島「うん」
藤「私は、その証としてあげられるのは、トランプさんは先週のＧ７の１日目には出たんですけど、ロシアに対する制裁は一貫して拒否したんですよね。逆に言うと、私が注目したいのは、２１世紀に入ってからアメリカの大統領は経済制裁、特に金融制裁を対応していたんですが、彼は、はっきりと金融制裁は、もうやらないと言い出したんですよ」
水島「うん」
藤「特にロシアに対しては」
水島「そうでしたね」
藤「インフレになっただろうと。ロシアのビジネスが減ったじゃないかと言って、一貫して拒否したっていう意味では、相変わらず外交的には未だ孤立を保つと」
水島「そうですよ」
藤「またもや周囲は裏切られた気持ちがあるかもしれませんけども、私は基本的に、トランプさんは変わってないと」
水島「うん」
藤「だから逆に相手が、弱みを見せたら、とことん叩いてきますから、特に北朝鮮は物凄い勢いで核開発を進めるでしょうね」
水島「いや、だからね、ＭＡＧＡのあれとは相反することをやっているけども、つまり我々が考えなきゃいけないのは、トランプって、ある程度、思想があってやっているなら解るんですね。我々の、これこれ、こういう思想で哲学があって、このアメリカをグレート・アゲインにしなきゃいけないというような方針の下にやっているっていうよりも、波乗り外交というかね」
藤「私、ご指摘の通りだと思うんです」
水島「うん。それでね、勘が鋭い奴だからバァ～ンッとやって、それで違ったら直ぐやめるっていうね。コロコロ変わるじゃないですか。脅かしまくってね。だから日本の今言われている自動車の２５％関税ですか、これだって、もう７日になったら、それ、やるからなって今、言っているけど、もしかしたら、また変わるかも判らないですよ。ただ、それをオロオロしてね。何とかして下さいって感じでやっていると駄目でしょう。やっぱり馬鹿はビンタ張った方がいいっていう風になれば、どうしてもビンタ張って言うこと聞かせちゃうっていうねぇ…」
大井「やっぱりトランプさんは哲学とかね、深淵な思想とか、深みは無いけれども、非常にプラグマティックに目先の利益を積み重ねながら動いてきたと」
水島「うん、そうです」
大井「そういう意味では、今迄の約束した政権としては色々と、まぁ、ちゃんと一つ一つ課題を潰して来たと思うんですよね。それなりにやってきてここまで来たと。その間に、イーロン・マスクと喧嘩したとか色んな事がありましたけれども、ただ相手が何処に自分との利益の敵対するところがあって何処で折り合いつけられるかって、この見極めが直感的に凄い」
水島「そうですね」
大井「その匂いをかぎ分けるって言うんですかね、動物的、瞬間的な何か物凄い能力があるのか、或いは、そのブレーンが非常にしっかりしていて、情報が非常に的確に伝えられていて、しかもイーロン・マスクもそうですけれども、量子力学的な次に何が起こりそうかというシナリオがばぁ～っとあって」
藤「（笑）」

大井「かなり、彼らは次が、これがこうなってと何千通りのシミュレーションをやって、その中から、かなり正確に読み取って現実的に動いているんじゃないかなという気はします」
水島「うん」
大井「ですから、対トランプで日本はどうするべきか、モーガンさんがおっしゃるような自立、独立を目指すのであれば、日本は、我々が国益を主張してトランプに立ち向かわなければいけないかっていう、我々が日本人として生き残る為に、何を優先順位として掲げて、こういう形でトランプと戦うっていうか、まぁ、ディールをしなきゃいけないので、そこを、ちゃんと粒々に考えて、何千通りのシナリオがある中で、やはり、ちゃんと計算合理性を持って立ち向かわないと、そのイデオロギーとか思想とか好き嫌いとかじゃなくて、何かもっと根本的量子力学的なレベルで、ですね（苦笑）」
水島「ほんとに、そういうねぇ」
大井「しかし大変な時代ですよ」
水島「そうですよ。だから日本の現在っていうことになると、日米安保で８０年、ずっとお付き合いして来て友好国だから、きっと私達の誠意とかを解ってくれるみたいなね」
大井「全く関係ないと思います」
水島「関係ないでしょ」
大井「えぇ」
水島「だから米を妥協すれば多分、車は勘弁して貰うとかね、こういう感覚のディールっていうか交渉の仕方しているんじゃないかと思うんですけど、大高さんは、この問題は、どうですか」
大高「どうですかって、まぁ（苦笑）」
藤「（笑）」
水島「日本の姿勢っていうのがね」
大高「えぇ」
水島「交渉っていうのが出来ないんじゃないかなと。足して２で割るぐらいでね、大体、今迄、やってきたのは要求されると半分ぐらいで勘弁して下さいっていう感じじゃないかというねぇ」
大高「うん」
水島「つまり交渉じゃないんですね。だったら、俺は、こっちの方をやらしてくれよと。核武装させろよとかね。じゃあ、米軍、出て言ってくれよとかね。いいよ、出て貰っても、うちは構わないからというぐらいのことを言って…」
大高「とことん、お花畑で世界と真逆の方向に驀進して、今回の核にしたって真逆なんですよね」
水島「そうですね」
大高「岸田さんが核不拡散でねぇ、何十億もお金を投入して外国のシンクタンクにも払っているのに、じゃあ、あれは何だったのって一言も言わないんですよね。だから、結局、日本が馬鹿にされているんですよ」
水島「もう、舐めきられていますよ」
大高「ねぇ。うん。それでねぇ…」
モーガン「（挙手）」
大高「あぁ…」
モーガン「あぁ、どうぞ、ごめんなさい。どうぞ、ごめんなさい」
大高「それでイスラエルの人達と性格が真逆なんですよ」

水島「そう」
藤「それは言えますね」
大高「あたしも本当に真逆で、ある意味、肯定はしませんけれども、彼らが本当に偉いなと思うところは、自分達の国の存続の為なら何をやっても嫌われようが構わないで…」
水島「もう人殺しをしてもいいっていうことですから」
大高「そこが本当に徹底されていて、もう、そこは本当に凄いです」
水島「そうですね」
大高「あと、もう一つ日本人と決定的に違うのが、頭の思考回路が超法規的な概念の動きをする人達な訳ですよ。だから国際法だってね、例えば、どこそこ、レバノンへ行ったことがあるって言うから、えっ、どうやって入ったのと聞いたら、パスポート無しとかで、そういうことを普通に言うんですよ。だから、そういう感覚で生きて来た人の世界を見る目、強かな生きざまでやってきた今の結果が色々出ているけれども、でも、もっと強かなのは、やっぱり、さっきから名前が出ているイギリスですが、結局、イスラエルを創った要因の一番、根っこの部分はイギリスにあると、私は思っているんでね。
そこが、ずっと４８年から８０年近く水面下でイギリスからしてみれば、米英からしてみれば、中東の一つの自分達のハブでイスラエルっていうのを置いておいて、戦うのは、もう、イスラエリィにやらせようと」
水島「うん」
大高「そこに戦争屋が便乗したら常に紛争があるっていうことは、彼らにとっては儲かる訳ですよ」
水島「うん」
大高「そういったシステムが作られている中でのイギリスの存在っていうので、だから、宇山さんがおっしゃったような関与っていうのはね、本当にあるなぁと、私は思っていて、いかに世界がセルフィッシュな本当に人の死を何とも思わないものが凄いスタンダードだけども、例えば海外留学して行くと色んな外国人が居ると。その中に日本人を一人、入れておけっていう事を言うと（笑）」
藤「あぁ、それは、そうですね」
大高「ねぇ、アラブ人に言われたことがあって、何故って言ったら日本人が居ると、まぁまぁ、まぁって言って話が収まるんだと（笑）。そういう役割だって、言われてみればそうかなぁと。外人同士は直ぐ喧嘩するんですよね。まぁ、やるでしょ。だから、この気質はいいようにね、世界に生かせればいいけれども、でも諸刃の剣なので、両方の顔を持っていなきゃいけない。そっちが今、全く無い。こう言ったら嫌われたらどうしようとか、国際社会に、こんなことを見られたらどうしようとか。だから偽善者で核を廃絶しましょうって言って、お金をばら撒いて馬鹿にされるというね」
水島「うん。そうだね」
大高「やっぱり、ここは、もうちょっと現実的に、私はトランプさんっていうのは面白いと思うんですよ。まぁ、簡単には言えないけど、彼の一挙手一投足で世界が変わっちゃう訳ですからね、振り回される部分もあるし」
水島「そうですね」
大高「だけれどもねぇ、もうちょっと日本人の、何て言いますかね、この（笑）」
水島「もうねぇ」
大高「良い子の国際社会の大人しい、でも一歩、間違えれば、ただのお人よしの間抜けになるんでね」
藤「いやぁ、ほんと、そう」

水島「学級会みたいなんだよね。いや、本当にね、誰々君は悪いと思います。賛成の人、手を挙げて下さい。はーい、なんてね」
大高「うん、そう。（笑）」
水島「私は経験がありますよ。小学校の日誌教育っていうことでねぇ、３１年からずっと小学校でしょ、１年生。そうすると今日の学級会の反省。誰々君が掃除をサボりました。悪いと思う人は手を挙げて下さい。え～～ってやって（笑）」
一同「（笑）」
水島「誰々君、水島君じゃないんだよ、ね、藤君とかね」
藤「（笑）」
水島「みんなで非難決議じゃないけど、そうやって…」
藤「キャラ的にはそうですね（笑）」
水島「これから気をつけて下さいとかね」
一同「（笑）」
水島「これが民主主義だっていうね」
大高「それ、馬鹿かって話で（笑）」
水島「馬鹿みたいな話よ。そんなことをね」
大高「ほんとに。うん」
水島「でもね、私が小さい頃、小学校１年の頃から、そういう学級会とか、そういう感じだった。結構、小さい頃から学級委員やっていたから解るんだけどね、そういう感じで、何でも多数決がいいみたいなねぇ」
藤「そうですねぇ」
大高「それでね、朝日新聞が『バスに乗り遅れるな』なんて言ってね」
水島「そうだよね」
大高「核開発だって六者協議に任せておけば大丈夫だなんて言っていたけど、北朝鮮が核を持っちゃったじゃないかっていう話でね、全部、これに騙されて来てんですよ」
水島「結局、そうですねぇ」
大高「そう」
水島「まぁ、これねぇ、矢野さん」
矢野「はい」
水島「ずっと色々と分析して来たんだけどね、日本の場合は、矢野さんも悲憤慷慨すると、来たんだけどね、現実に言うと本当に根本から変わらないと駄目ですよねぇ。どうですか、この核武装も含めてね」
矢野「私は前から、核武装するしか生きる道は無いと思っているんですけど」
一同「うん、うん」
矢野「その前に、先程、出た話で補足したい事を数点、申し上げたいんですが、宇山さんからあったバンカーバスターの効果ですね」
水島「うん」
矢野「これで地中目標を破壊できるかと言うと、私は軍事技術的に、まず無理だと」
藤「なるほどね」
矢野「まず、第一に地下構造物の目標の情報が判らないですね」
水島「あぁ、そうかぁ」
矢野「正確な情報が判らないのに、攻撃できる訳がないですよ。撃つと言ったって的外れな所になる。だから彼らはイラン側が言っていたのは、入口の所は破壊したと言っているだけですね。もし地中目標が破壊されていたんだったら、放射能の漏洩とか、大量の放射

線を浴びた死傷者が出て運び出しているとか、そういったことが無ければ、おかしいですが、そういう情報はアメリカ、イスラエルからも出ていませんね。だから出来ていないということ。それからイスファハンについては地下に深く入り過ぎて、始めからバンカーバスターで攻撃しなかったと」
水島「あぁ～」
矢野「何故、フォルドだけにやったかと言うと、まぁ、出来ないという見方もあります。それから、あそこは巡航ミサイルです。潜水艦で海上から撃ったんですけど、あれでは、地中には全く貫徹しない」
水島「あぁ、そうでしたね。潜水艦から一発、撃ちましたね」
矢野「えぇ。だから、さっき言われたように、出来レースと言うかショーと言うか、出来ないことを分かっていてやったんだろうと」
水島「なるほどね」
矢野「それから、イランとイスラエルの戦力差について、モーガンさんからご指摘があった訳ですが、はっきり言ってイランが圧倒的に優勢です。イランは２年前の時点で、これはアメリカの見積もりですけど、３千発ぐらいの弾道ミサイルを持っていると」
モーガン「なるほど」
矢野「それから、あとは対空ミサイルとか、その他巡航ミサイルを合わせて１万発ぐらいあるだろうと言われていまして、今回も、せいぜい抗戦でイスラエル側に反撃しましたけど、弾道ミサイルも２５０発ぐらいしか撃っていないです」
藤「う～ん」
矢野「ということは３千発の極一部にしか過ぎない。しかも…」
水島「あれ、イスラエルはミサイル基地を叩いてね」
矢野「えぇ」
水島「貯めていたミサイルを全部、破壊したって、やっぱり、これも嘘ですか」
矢野「一部、そういう弾薬庫を破壊したかもしれないけど」
水島「限られているね」
矢野「それは、もう３千発の前提から見れば大したことはない」
水島「いや、それねぇ…」
矢野「第一、その一番いいミサイルは地下深くに埋めているので、破壊されるようなミサイルは古いものとか、そんなものだと思いますよ」
水島「うん。いやいや、確かに普通に考えてもバンカーバスターって垂直に来るっていうふうにねぇ、みんな、説明していたけど」
矢野「えぇ」
水島「こう曲がって、こっちへ行っちゃったら、どうなるんだろうっていうね」
矢野「フォルドもナタンズもそうですけど、地下構造物の上に何層も非常に堅固なコンクリートとか、それから特殊鋼を入れて防衛壁を造るんですよ」
水島「あぁ」
矢野「だから当たっても、ちょっとした歪で逸れてしまって弾が垂直に入らない」
水島「あぁ～」
矢野「だから、公称では８０メーターまで破壊できると言っても、実際は４～５０メートルぐらいの途中で破壊して爆発して逸れると。これは装甲板って、みんな、そういう風になっているんですけど」
水島「なるほどね」
矢野「そういった巨大なものが何層もありますから。だから、そんな予定通りに最大進路

で破壊出来る道理が無い」
藤「そうでしょうねぇ」
矢野「それから、今回のイスラエルは最後、出し切ってしまった。だからミサイルが弾切れ起こしているということが言われていて…」
水島「あぁ、そうですね」
矢野「そういう意味でも、アメリカも内情を知っていますから、トランプの和平の呼びかけに応じざるを得なかったと。ない袖は振れないという状態。レイソン等もアメリカの軍需産業も今、ウクライナの方にミサイルの増産したものを送っていますから、もう今、米軍自体の弾薬点数って言うんですけども、保有すべきミサイルの弾が足らない状態になっているんですね、ＰＡＣ３なんか。だから日本でもＰＡＣ３を作ってアメリカに売ったりしているんですけど、まずミサイルが足りない」
水島「うん」
矢野「だから今、アメリカには、とても、そんな余裕は無い。だからアメリカもイスラエルもギリギリのところでブラフをかけてイランを潰したと。核施設を潰したということにして手を打ったと。打たざるを得なかったというのが実態ではないかということですね」
水島「なるほどね」
矢野「それとＢ２と、それからバンカーバスター、これは一番、高価な兵器ですけど、使って見せたっていうのは、一つは兵器の売り込み」
水島「あぁ」
矢野「つまり、アメリカの兵器がウクライナの地上戦、特に陸戦兵器があまり役に立たない。高価なだけで複雑で整備も出来ないし、兵站、ロジスティックが大変だということが判ったので、それで信頼が無くなっているので、だから、兵器を売り込もうと思ったら、やっぱり最新の特に航空戦力。Ｂ２を実戦投入して実力を見せると。だから万々が一にもＢ２が撃墜されるようなことがあったらいけないんで、その為にイスラエルに徹底的に、地上配備のミサイルやレーダーサイトを潰させた」
水島「あぁ、最初にそれが…」
矢野「これで出来たというところで、入れたということですね」
水島「なるほどね」
矢野「それから、あのう…」
水島「そうすると解りますねぇ」
矢野「計画性の問題ですけど、あぁいう非常に精密な空爆をやるっていうことは、そんな俄か仕立てで出来る訳がない」
水島「うん」
矢野「少なくとも実戦的な配備まで含めて、恐らく半年ぐらい前からは準備しなきゃいけないということで、今、トランプについて色々お話があったんですが、少なくとも今回の軍事作戦については周到な準備を軍がやって、それの上申を受けて、トランプが認可したという形でやっているので、非常に精密に組み立てられた作戦だという風に思います。
その作戦自体は上手くいきましね。ただし本来の目的である、核施設を潰すということは出来ないし、最初から、それは出来ないだろうと見越した上でやったと。それを最大限、宣伝効果としてプロパガンダ材料に使ったと」
藤「(笑)」
矢野「だからメディアが一部、情報漏洩して、実は成功していないって言ったのをやっきになって、トランプ政権を潰した訳ですよ」
水島「うん」

矢野「それは、今言ったように売り込みの問題とか、それから、何としても、これで戦争を収めるということで、更に戦争を続行させる口実をイスラエルに与えないということでもあったということですね。ただ、レイソンは今、非常に、しゃかりきになって、また、ミサイルの増産をやっていまして、イスラエルも、また、そういう態勢を執っていますから、イスラエルは人口規模が少ないですからね。７００万ぐらいしかいないので、長期の地上戦とかは３か月ぐらいしか続けられないんですよ」
水島「そうですね」
矢野「だから、一旦、少し休んで休戦だとか停戦だという口実をもうけて、その間に又、もう一度、増産してアメリカから軍事支援を受けてということでやる訳で、これで終わる訳ではありません。また、やろうとします。しかし、今言ったように、核を潰すことは出来ないということが、米軍をもってすら出来なかったということですね」
水島「うん」
矢野「これは、さっき言ったようにイランの核保有というのは、むしろ促進されると見るべきだと」
水島「なるほどねぇ」
矢野「潰せないと」
藤「なるほどね」
水島「ということは多分、アメリカも、それは解っている訳だから」
矢野「あぁ、解っていますね」
水島「ということは、今、さっき言ったイスラエルが核を持っているか持っていないと言わないように、イランも持っているか持っていないか言わないまま核保有をして、恐らくサウジもという感じが広がって来ますね」
矢野「元々７０年代にイスラエルの核を黙認した訳ですけど、これは４次に渡る中東戦争で、通常戦争がこれ以上、激化してイスラエルが存亡の危機に立つと米軍が介入せざるを得ないと」
水島「うん」
矢野「地上軍を送って大変な損害が出るということで、それをさせない為にイスラエルに核抑止力を持たせるっていうことを黙認したんです」
水島「そうですね」
矢野「正にダブルスタンダードです。国益に適えばインドもそうですけど、アメリカは、核保有を黙認するんです」
水島「そうですねぇ」
矢野「だからイランや北朝鮮は駄目だけど、イスラエルはいいって言うのは当然ですよ」
藤「なるほどねぇ」
矢野「ダブルスタンダードは当然です。それは何かって言うとアメリカの国益です」
藤「まぁ、ダブルですからね」
矢野「えぇ。これは、ある意味、もう常識ですね」
水島「まぁ、そういう意味で言うと、これからの流れがね、本音が判ると、核武装っていう問題も出て来るんですけど」
矢野「あと、ロシアの問題ですけども、私は今回、ウクライナ戦争をやっている半面で、本来ならば、このアメリカを引き摺り込んで長期消耗戦にもって行けば、ロシアとしては利益になるはずですね。だけど敢えてイランに対して、大々的な武器援助はしていません」
水島「うん、やっていないですね」

矢野「むしろ、援助したのは中国と北朝鮮じゃないかと言われていて、ミサイル、弾薬を積んで輸送機がイランに着陸して支援をやっているんじゃないかと、こういう話もあるんです。ですから中国は、やっぱりイランが負けて貰うと、今、原油を買っていますからね」
水島「うん」
矢野「だから、ホルムズ海峡閉塞は誰の得にもならないのでやりませんけど、少なくともイランを完全にイスラエルによって叩かれて、例えばレジーム・チェンジが起こるようなことはさせないということは中国の利益ですから、そういう意味で貿易的利益を中心に、中国は送り込んでいる。しかし、表向きは協力的姿勢で停戦にも合意すると」
水島「うん…」
矢野「こういうことで、中国は、アメリカは敵にしないという政策ですね」
水島「そうですね」
矢野「今、中国は内政が混乱して経済も疲弊していますから今、ここでアメリカと正面から、ことは構えられない」
水島「うん」
矢野「ロシアは逆にウクライナの戦争をやっているにも拘らず今回、停戦に合意して、しかも軍事支援しなかったということは、トランプの顔を立てたということで、恩を売った訳ですよ。ということは逆にウクライナの戦争の経過で今、やっているのは４州を越えて緩衝地帯をつくっているんですけど」
水島「そうですね」
矢野「今後は、この緩衝地帯を含めてロシア側の望む体制で停戦に合意するという事を、アメリカに飲ませると」
水島「そうでしょうね」
矢野「その為に恩を売るという絶好の機会だと見ている」
水島「そうですね」
矢野「それと同時に、やっぱり、それ見た事かとＢ２やバンカースターを使っても破壊出来なかったと」
水島「うん」
矢野「それに対して、我々はオレシュニクで数百メーター四方に渡って地下施設１００メーター迄、破壊したと」
水島「そうですよねぇ」
矢野「この差ですね。だから今回、何故、あぁやってバンカーバスター投入したかって言うと、やはりロシアに対しての対抗っていうのがある。ロシアや中国に対して見せつけて、アメリカをあなどるなと、我々にはこれだけの最先端の兵器、システムを運用できる力があるということを見せつけたという。
それで、さっき言われたトランプの本質の問題ですが、私は、基本路線は変わっていないと思うんですね。つまりアメリカ自体、本土防衛を第一でやって、対外介入は基本的にしないと。だけど今回の場合は、例外的にあった。しかし、トランプ大統領の前の一期目の時のシリアもそうですし、それから今回になってから一番、初めにやったのはアフリカで一回、テロリストにやっているんですけど。だから、どっちも事前通告をやって、被害者を出さないようにしているんですね」
水島「そうですね」
矢野「今回も事前通告やっている。ということは、武力行使はするけども、努めて敵味方共に人的損害は出さないと。その方針は変わっていません。だから、私はトランプ流のや

り方の戦争術というか、武力行使の仕方っていうものの一つのパターンと言うか、枠を維持したまま、今回の作戦もやっているということで、そういう点では一般的に言われている程、トランプさんは思いつきで決めているっていう訳ではなくて、やっぱり軍も国防総省も国務省もバイデンの時よりは遥かに組織的に、それぞれの専門性を踏まえてやっているんじゃないかというように、私は見ているんですけどね。
一般的なトランプさんのあれは、あくまでも相手を攪乱する為のディールとしてやっている。だから吹っ掛けるんですよね」
水島「そうですね」
矢野「吹っ掛けて交渉して相手の出方を見て、ここまでなら出来るというところで、最後の落としどころに持って行くと。それは、あくまでディールであって対外的なポーズですよね。本音の世界っていうのは、むしろ逆で優秀なスタッフを集めて組織的に非常に周到に計画的な行動を執ると。それが軍事作戦では典型的に表れているという風に思います。
最後に一神教の問題について、お話をさせて戴きたいんですが、要するに、私は先程からイスラエルとアメリカ、特にネオコンとか、こういう勢力、グローバリストですよね」
水島「うん」
矢野「彼らの力っていうのは非常に強いっていうことは、お話もあった通りで、そう簡単に克服は出来ないと私も思うんですけれども、しかし世界的な流れというトレンドを見ると、もう一神教の時代は終わった。欧米重視、中心の時代も終わりました。それから海洋勢力の中心の時代も終わったと」
水島「うん」
矢野「これからは一神教じゃなくて日本のような、もっと自然教と言うんですかね、自然宗教に近いもの、ＧＯＤを必要としない唯一絶対の創造者を必要とせず、選民思想に立たない調和と共存の思想が文明の中心になっていくと思う。だからロシアは、そういうところを持っていますし、それからインド世界も、イスラムの方がキリスト教よりも遥かに寛容です。
そういう意味で新しい世界っていうのは、もっと異質な文明の共存という方向に向かって行くだろうと。そういう意味でも多極化になる。欧米が支配してコントロールする時代は終わって、もうＧ７をやっても、それが世界の主流になる時代はもう終わったと」
藤「そうでしょうねぇ」
矢野「その辺の人口動態から経済成長力とか、まぁ、そういうものを含めて、或いはエネルギーの支配能力、コントロールする能力を含めて、原油とかレアースがそうですけども、まぁ、こういうものを含めても欧米支配の時代はもう終わったということですね。
それで日本の立ち位置というのは、それを本来ならば仲介する一番、重要なポストに居て、技術力にしろ文明力にしろ、長い縄文以来の歴史を踏まえても、日本の文明の価値というのは、もっと認識されるべきだと。だから、まず日本人はもっと自信を持つべきだと思います。自信を持って、自ら自分達の先祖から伝えられて来た価値観というものを再認すると。そこから始めるべきだ。もう欧米は手本にならないし、アメリカも助けてはくれないし、アメリカの助けを求める時代ではない。そういう風に思います」
水島「まぁ、本当にねぇ、そういう風になってくれると、ほんと、いいと思うんですけどね。宇山さん、どうぞ、はい」
宇山「私も矢野先生と全く同じ考え方でして、６月２２日のアメリカのミッドナイト・ハンマー作戦は、極めて緻密で精密な作戦に基づくものであって、思い付きで決してできる様なものではないということに全く同意致します。そういう点で、よくテレビのコメンテーターが言うような、イスラエルの６月１３日の空爆が上手く行き過ぎたので、そこに後

乗りで、ホイとやったんだと」
矢野「あり得ない」
宇山「そういうことは、私も矢野先生と同じようにあり得ないというように思います」
水島「全く無いですねぇ」
矢野「全く計画的だ」
宇山「そういう意味では、やはりトランプ大統領っていうのは、見かけ以上に中々精密なところがあるんだろうと思います。そうすると、やっぱり、これは八百長説というようなことも、やっぱりトランプ大統領が考えてやったんだろうと。あのバンカーバスターというのが何処までやれるかということも全部、本人は判っていてやっているんだろうと思います。軍もその辺のところは全部、私は解っていると思いますし、イスラエルとも、その辺のところの情報共有が出来ていると思います。じゃあ、よく言われるのは、こういう八百長をやって、実際にはイランの核施設が破壊されていないんでしょと。
じゃあ、イスラエルは引き下がらないんじゃないのかっていうことが、よく、この部分を指摘されるんですが、一旦はイスラエルは引き下がってくれると私は思っています。何故ならば、ネタニヤフは今、支持率が非常に低下をしている訳です。ネタニヤフ政権の支持率が、核施設の爆撃によって一気に上昇したということがありました。
ネタニヤフは来年、選挙を控えている訳ですね。それに向けて、早目に解散総選挙を打ちたいという思惑もあるようなので、まずは一旦、自分の支持率が国内で上がれば、それを良しとするという点では、イスラエルもこれで引き下がってくれると、短期的には、そういう部分があるということをトランプ政権は見込んでいるなというように思います。だから、そういう意味ではトランプ大統領っていうのは、やっぱり馬鹿じゃないんですよ」
水島「うん」
宇山「よくイスラエルの国内の動きを見ながら、何処から何処までイランと八百長芝居をしながら、イスラエル、ネタニヤフ政権を引き下がらせる為にはどうするかといったところまで、やはり緻密に考えていると。確かにトランプ大統領の関税問題については、何やらデタラメなことを思い付きで言うことはあるかもしれないけれども、こういう軍事作戦に於いては、極めて緻密な作戦というのがあるのではないかなぁと思います。
これはあくまで短期的な話です。短期的にそういう流れは言えるんだけれども、じゃあ、長期的に見て、本当にイスラエルの暴走が止まるのかと言われれば、それは保証の限りではないと思います。イランだって、どういう行動に出るのか。イスラム革命防衛隊は、このまま引き下がるのかというような問題として考えれば、長期的には、この戦禍がワッと拡大をしていくというリスクは、誰も否定できないというように思うんですね。
翻って日本のことも説明したいと思うんですが、ホルムズ海峡の封鎖ですね。こんなことが言われる訳ですけど、私は、それは、ほぼあり得ないと思います。何故ならば、このホルムズ海峡を封鎖されて油が輸入できなくなるのは、中国も同じですね。実は、アメリカは中国に対しても、ホルムズ海峡の封鎖をやったらいかんというように、お前からイランに言えというようなことで、アメリカが中国に圧力をかけて、中国がイランに対してホルムズ海峡の封鎖は、いかんぞぉというような、そういう形で話がついている中では、イランがホルムズ海峡の封鎖をするっていうことは、まず、あり得ないと思うんですが、万が一、このホルムズ海峡が封鎖をされた時のシミュレーションもしておかなければならんと思います。
これは日本にとっては、存立危機事態にあたるというように思いますね。やはり、油が入ってこないということについて、日本は存立危機事態をきっちりと自衛隊を出して、まぁ、機雷なんかを除去するというようなことを、ある一定のレベルで武装した勢力が出て

行かなければならないと。私達は知らぬ存ぜぬでは済まないというようには考えております」
水島「なるほどね。これは、結局、ちょっと嬉しいのは、我々が言っていたことと、実はイスラエルを止める為にバンカーバスターを落としたということ、もう、これは流れとして、皆さん、結論は大体、一致したような感じがしますけれど、ただ、今、おっしゃったように、今はそうかも分からないと。
ただ将来的にどうだって言うけど、私が思っているのは、さっき、ちょっとモーガンさんが言ったところですけど、トランプが現実的に真面にやったのは少なくとも、ある大国、ペルシャという大国の核施設のある場所に、形は、う〜ん、まぁ、本当はどうだったかは別として、彼らが言っているのは核施設を完全に破壊したということを言ってしまった訳で、具体的にやっているんですよ。
だから、この問題が今、トランプが一時的なものとしてやるのか、これから、いざとなったら、こういうことをやるんだよっていうことの一つの示しを示したのか、いずれにしても、イランもイスラエルも、どっちも実際は違うと判っている。アメリカも判っているし。
そうなると、そのまま収まるとは思えないという形になっているんですよね。ただ、その中で、我々がこれから考えて行かなきゃいけないのは、ホルムズ湾のことも勿論、そうだけど、ロシアとイランの関係とか、こういう関係でロシアとアメリカの関係は、トータルでアメリカとロシアが世界秩序の中心になっていく。
中国っていうのは今、この間、聞いて、ちょっとビックリしたのは、人口が９億６千万人になっているって」
藤「あぁ、そういう数字も出ていますか」
水島「ねぇ、それは、ちょっと驚いたんですよ」
藤「前から少ないんじゃないかってね…」
水島「大体１４億とか、我々はイメージを持っていたけど、つまり、さっきの人口論で言うと相当、そっちの方もヤバイ」
藤「うん」
水島「うん、労働人口も、この間もね…」
藤「農村部の人口把握が出来ていない可能性がありますからね」
水島「そうですよ。そこも情報として、あまり言われていないことですけれども、可能性があるっていうことを見ておかなきゃいけないんですけど、そうなると、どの程度、中国を考えるかと言ったら、ロシアとアメリカの北極海のシベリア開発とか色んなものを考えると、まぁ、トランプの戦略的な流れは、やっぱりロシアと共同で世界をある種コントロールしていく流れを考えているんじゃないかと」
藤「うん」
水島「どっちも、これは石油も地下資源も食糧も全部、自分で出来る国ですよね。中国は違いますからね」
藤「うん」
水島「となると、それは相当、強いですよ。関税の時も何も、みんな、どんなことでも、この二つが手を組んじゃったら」
藤「でしょうね」
水島「何でもやれちゃうっていうね」
藤「うん」
水島「もう言う事を聞かざるを得ないっていうね、こういう状態を実は遠く考えているん

じゃないかな。プーチンとトランプは考えているんじゃないかというね」
藤「うんうん」
水島「そうなるとイランの体制も、これからどうなるっていうのも見えて来るっていうね。中東に対する和平の策も見えて来るっていう感じがするんですけど。という中で、我々の国ですね。申し訳ないんですけど」
大高「米露、アメリカとロシアの繋がりって、社長がおっしゃった非常に重要なポイントだと思っていて、鍵になるのが、特にユダヤ教のルバビッチ派っていう宗派がニューヨークに拠点があるんですけれども、クシュナーさんがそうだとも言われていて、ロシアにも、反プーチン派のジューイッシュが居るんですよ。
それで親プーチン派はルバビッチ派と言われていて、つまりニューヨークとモスクワで、情報交換から含めて彼らは繋がりがあるんですよね。だから、アメリカとロシアの対立って色々なフェイクはやりますよ。
だけれども水面下で彼らがガッチリと、トランプとプーチンさんをハンドリングしているとしたら、まぁ、ハンドリングまで出来ているのか関与なのか判らないけれども、かなり喰い込んでいるのは事実なんです」
水島「うん。そうか、なるほどね。その問題は…」
大高「そう、うん。そうするとイランと…」
水島「ちょっと、我々一般論で、ごめんね」
大高「うん」
水島「今、一般論で言うと、ちょっと意見を聞かせて貰いたいんだけど、１０月革命のユダヤ人のボルシェビキ革命をスターリンが、まずね、それをユダヤ系の革命をスターリン革命に替えた。グルジア出身ですからね、それを、またロシア人が自力で共産主義体制っていうのを克服していった」
大高「はい」
水島「っていうイメージを持っているんですよ」
大高「はい」
水島「今、言ったように非ユダヤ化っていうのが、実はロシアの流れだったっていうね」
大高「うん」
水島「そういう感じを持っているんですけど」
大高「それが大きなテーゼです」
水島「うん、そうそう」
大高「ただ細分化して細かくプーチンの周りを見て行くと、だってユダヤ人達は居る訳ですから」
水島「そうそう、トランプにも居るんだよね、クシュナーとかね」
大高「そこで色々調べたら、やっぱり反プーチン派。今言ったようなユダヤ人排除をしていた、そっちに乗らないユダヤ人っていうのは、プーチンが大事にする訳ですよ。そこがルバビッチ派ですよ」
水島「うんうん」
大高「だから…」
藤「あぁ、なるほどね」
大高「トランプゲームで言えば、こっちのカードを持っていた方が得だろうという、そういった非常にグローバルな人達の関与があるとしたら、今のイスラエルとイランも、皆さんがおっしゃっているように小休止ですよ。いつ、また、どうなる。お互いに今、あぁ～、もう疲れた、もう弾もねぇし、でも、また力を温存したら、やり出す可能性は充分あ

るんですけども」
水島「そうだね」
大高「だから、そこで米露が大国として、どう抑えられるか。その力関係っていうのは、非常に大事なポイントかなと思うんですけれども」
水島「うん。だから、イスラエルの中にも、所謂、ハザール・ユダヤとね…」
藤「あぁ、ハザール」
水島「純粋ユダヤとか、色々言い方があるじゃないですか」
藤「うん」
水島「その問題、もう一つ言うと、ユダヤ人問題っていうのを一体、どう見るかっていうね、アメリカの経済が握っているのも今、そうだし、現実に言うとロスチャイルドと、あっちの方のやっているのも、みんな、ユダヤ系の人が多い訳でしょう」
藤「うんうん」
水島「こういうことは逃れられない事実だし、それから、この間、ちょっと発表しましたけど、これはタッカー・カールソンだったか誰だったかな。あっ、あれはサンダースだ、民主党のね。彼が言ったのは、アメリカの企業の９５％がブラックロックとか、え一何て言うんですか、大きなのが３つあるじゃないですか」
藤「あぁ。ＫＫＲとかですか」
水島「そうそう。そういうね、これが９５％筆頭株主だって。これが、実際はアメリカの権力だっていうね」
藤「あぁ、まぁ、そうでしょうねぇ」
水島「だから、そういう意味で言うとね（失笑）」
大高「本当に難しい（苦笑）」
水島「相当、強い訳ですよ、おっしゃるようにね」
大高「そう。で、難しいんです」
矢野「日本もそうです」
水島「日本もそうだね」
矢野「えぇ」
大高「ただ、ユダヤ人の定義が本当に今、もう複雑で難しくなって来ているので、全部、ユダヤと言っても、もう陰謀論だというレッテルが貼られるから、非常に難しいところなんですけどもね」
水島「でも、実際、それが事実だからね。陰謀論でも何でもなくて、現実だからね」
藤「でも最前線で戦っているのも、またユダヤ人同士っていうこともありますよね」
水島「そうだね」
藤「彼らも一枚岩じゃないから」
大高「一枚岩じゃないっていうのがポイントですよ」
大井「物凄く派閥が分かれているから」
大高「そうなの」
大井「思想的にも、それから先祖が何処から来たとか…」
藤「だから非常に才能があるのは判っているけど、才能がある故にみんな、角が立っちゃって、お互い、画策してとかねぇ。戦い合っているっていうことありますね」
大井「そうですね。オーソドックスの人は、またね、オーソドックスで凄いですもんね」
大高「そう、もう世俗は大嫌いでね」
水島「だから、それもねぇ、やっぱり、このユダヤの優秀さっていうのはねぇ、いかにも戦っているようで、実は、ちゃんと手を組んでね」

大高「そうそう、そうそう」
水島「やっているとかね」
大高「米露を抑えてとかある」
水島「これは優秀な民族ですよ、まぁ、悪い意味でね」
藤「ああいう、おかれているねぇ、歴史を考えれば、そうですよね」
水島「我々がこの問題に関してはいかにトロいかっていうね。政治的な問題とか、悔しいけど」
大高「矢野先生がおっしゃったように、一神教が、もう弱まって来る」
矢野「えぇ、えぇえぇ。行き詰っていくだろうと思うんですけどねぇ。だから今、イスラエルとアメリカが世界から孤立しているじゃないですか、逆に言うと正にワシントンが」
大高「うん」
矢野「ワシントンとニューヨークが、イスラエルと一体になって世界から孤立している」
藤「でも、それを言っちゃうと、中国も孤立し始めているし、カンボジアなんか完全に、もう組み敷かれましたよね」
大高「そうですね、あんなにコントロールされて」
藤「うん、一帯一路で金を貸して貰ったけども、貸してくれないし、貸しはがしが始まっているし」
矢野「うん、だから、そこに、最後、何処を見ているかって言うと、ふと見たら大金持ちの日本が居たり（微笑）」
大高「だから狙われやすい」
藤「あと、もっと言っちゃうと、いや、まぁね、日本は、そんな気概が無いですよ」
水島「いや、私ね、矢野さんの言う通りになって貰いたいと思っているけども、日本は、そこまで…」
藤「いや、そんなの甘過ぎますよ」
水島「一番、問題なのはねぇ、江戸時代までの日本人と、根本的に８０年以降のね、８０年経った日本人が質的に違うという現実を見ないと、我々は縄文から１万６千年前からのことを、私は２０年前から言っているんですよ。最近、縄文っていう人が増えているけど」
藤「うん」
水島「私は、それを言っているんですよ。もう世界観が違うんです」
藤「うん」
水島「世界と自分が一緒になっている。つまり個人があって世界があるという、今言った一神教の世界。神様の世界と自分は生きている世界と違うっていう、我々は一体化しているから、それは素晴らしいんですよ。いいと思うけども、じゃあ、今、戦後の日本人がそうかって言ったら、残念ながら、本当に伊藤貫じゃないけど『世界で一番臆病で卑怯な民族に成り果てている』っていうね」
藤「もっと言っちゃうと疾病利得って言われていますよね。疾病って病気で、半病人であるということのメリットを日本人は解り過ぎちゃったんです」
水島「そうそう。だから病院で大事にされるとね、調子に乗って」
藤「お見舞いに来てくれるし」
水島「そう」
藤「病気だから可哀想だよねと」
水島「うん。大丈夫ぅ～って言ってね」
大高「主権は無いけど（失笑）」

藤「みんな、これは、やっぱり最低でも一世代はかかりますよ」
水島「本当に悔しい話でね、ただ、そうならないように我々は頑張らなきゃいけないんだけども、私は絶対、希望は諦めないけどもね」
藤「あと、ひとたびの現状認識でお答えしたいのは、僕、多極化って違うと思っているんですよ」
水島「うん」
藤「ロシアだってコーカサスを中心に、どんどんロシア離れが起きていますでしょ」
水島「うん」
藤「無極化だと思うんですよ。ただ単にデカい国が３つぐらいあると」
水島「それがねぇ、西尾幹二さんが言っていた『アメリカは建国以来、一度たりとも国になったことがない』と」
藤「あぁ～」
水島「『世界である、常に世界である』と」
藤「あぁ～、まぁ、例外主義ですもんねぇ」
水島「だからロシア自体もスラブっていうねぇ」
矢野「スラブですね」
水島「世界かも分からないんですよね。今、プーチンは、しっかり、ちゃんと纏めているけどもね」
藤「でも、その求心力は今、無くなって来ていますよね」
水島「いやいや、そこなんですよ」
藤「うん。だって、この間のロサンゼルスのデモで、ロサンゼルスでメキシコの国旗を持った反対派が居たじゃないですか（笑）あれって一番、アメリカ人が見たくない画ですよね」
水島「だからね、この問題を、しっかり踏まえなきゃいけないのは、国民国家とかね、こういった、まぁ、ロックとかねぇ、ホームスが言った様な、国の概念が本当に溶けて無くなって来ている。だから、矢野さんがさっき、おっしゃっていた一神教の世界っていう宗教的な問題だけじゃなくて、その政治的な思想とか哲学の概念そのものも溶け始めているっていうね。今言ったように、本当に混沌ですよねぇ」
大高「一神教、あなどれないのがハルマゲドンね」
矢野「いや、ただ…」
大高「望んでいる人が居ますよね」
藤「あぁ、旧約聖書にありますからね」
大高「はい。福音派もそうですかねぇ」
モーガン「（頷く）」
水島「だから福音派なんて、それがあるからねぇ。待っているんですよ」
大高「そうなの」
水島「再臨を。それで今、シオニストって言われる人達は、どっちかって言えば、再臨が無いから自分達でやろうっていう」
大高「うん」
水島「ユダヤ人、イスラエル人だけで、この世界で千年王国を現実に創ろうってやっちゃっている」
藤「だから福音派は、やっぱり千年王国が出来ないと最後の審判が来ないから、何としても創らなきゃいけないですよね」
大高「だからイスラエルに構えて…」

水島「だから、おっしゃるように純粋ユダヤと言われる人達はそうじゃないと。ちゃんとキリストが再臨するまで、じっと待って頑張って生きて行こうと。ただ、そうじゃなくて今のシオニストと言われる人達の基本は、それが無くても今、自分達の手で千年王国をね…」
藤「福音派も同じらしいですね。アメリカの福音派も」
水島「そう、だから、そこが、だからねぇ…」
矢野「ハルマゲドン待望論（笑）」
藤「そこが問題ですよ」
宇山「福音派は、もうユダヤに乗っ取られた、もう悪しき堕落した組織になり下がっていると。これに、やっぱり今、支援をされているのがトランプ政権という、危険な組織に成り下がっていると」
水島「まぁ、そういうことですね」
宇山「皆さん、今、ユダヤのお話をなさいましたですけどもね、今、本当にユダヤが世界に対して悪い事を為しているのは、イスラエルの話だけじゃなくて、ウクライナだってそうだと思うんですよね。ゼレンスキー大統領はユダヤ人ですね」
矢野「全部、ユダヤ人（苦笑）」
宇山「その背後についているイゴール・コロモエフスキーというオルガルヒもそうですし、アンソニー・ブリンケンという先の国務長官はウクライナ系ユダヤ人ですよ。ヴィクトリア・ヌーランドというのはモルドバ系のユダヤ人じゃありませんか。みんな、結局、このウクライナで大紛争を起こして大儲けしてやろうというネオコン連中が、ここに絡んでいてイスラエルとも連携していると。
更には、今言っている福音派なんかとも連携をしていって、世界を戦争に駆り立てようとしているのが、このユダヤ・ロビィのＡＰＡＣ、アメリカ・イスラエル公共問題委員会などを中心とする、シオニストの皆様方一味だというように思いますね」
水島「福音派の場合はね、ユダヤと言うよりも、むしろイスラエルという国を最優先で守れというね、だから、そうやって段々共通になっちゃうんだね。ただ、これがトランプを選出した中心になっていますからね。だから、この辺は中々ねぇ、トランプの動きもそういう制約とか色々と、ＭＡＧＡでやっている人達も、実際は、そういう人が多いんですね。モーガンさん、これは難しいですね」
大井「いや、だけど…」
水島「あ、どうぞ。はい」
大井「ごめんなさい。今の議論を踏まえて、じゃあ、日本は、どうするかって言う時に、もし日本がグローバリスト達の楽園になりたくなければ…」
水島「そうなんです」
大井「抵抗する理論的根拠とか、日本の中でどう組み立てて彼らに対抗しなければいけないかっていうのを自ら構築して、あんた達、そう言うけど、うちらは、こういう、例えば審議論とか色々な彼らの言説で判るような言葉でやっつけなきゃ駄目です。未だ出来ていない」
水島「いや、全くそうですねぇ。だから、教育が全部、そうなっちゃったから」
大井「そうなっちゃったからね」
水島「根本からやらなきゃいけないけど、だから少数の中で、例えば、こういう議論もそうですけども、我々が自立する意味でのね、例えば、関税の問題だって、明治維新政府は、関税権を取る為に大変だった訳ですよ」
藤「凄くかかりましたよね」

水島「ねぇ。超努力をして戦争までして色々なことやって、こういうことも含めて、一回、これになると、また建前論に聞こえちゃうと拙いけど、でも教育から、きちっとね、塾とか私塾とかね、色んな所で本当に自覚を持った日本人をつくって行かないと、私は矢野さんの流れになって貰いたいと本当に思っているんでね、ただその困難な今、現在に生きている戦後日本人が駄目だからと言って説得でやってもしょうがない」
大井「うん」
水島「正直言うと、戦争でもないと、我々は自覚できないかも分かんない。悲惨な目に遭わないと、ちょっと簡単にお話をして、解ったね、我々の国は凄く良い国だからって、ずぅっと言い続けて２０年（苦笑）、だけど、中々難しいって、まぁ、そういう芽はあって沢山の人が自覚を持ってくれるようになってくれたと思いますけど、今、おっしゃったように本当に国の根本から変えないと。教育をね、少なくとも『教育勅語』なんか別に何も悪い事は無いからねぇ、やっていい、そういうのを教えた方がいいと思いますよ。
それから少なくとも道徳律って言うかねぇ、こういったもの、人を殺しちゃいけないとか仲良くしようとか『教育勅語』に書いてありますけど、これ、当たり前のことを、もう、ちょっとやらないと、最近の犯罪を見てもね…」
藤「以前、日本人の死生観っていうのを研究したことがあるんですけど…」
水島「うん」
藤「縄文時代から自然に流れている日本人の死生観って、生まれ変わりなんですよ。縄文時代の遺跡も全部、生まれ変わりですよ。それは残念ながら戦時中に七生報国みたいな形で悪用されちゃって、戦後の死生観って日本は空白なんですよ」
水島「無いんですよ。だから今だけ、金だけ、自分だけ」
藤「そう。そう考えちゃうと、もうちっぽけな自分を超えた大義に殉ずるなんて、出来ないですよ」
水島「いや、そうですよ。だから特攻隊がね、小林よしのりさんという漫画家がね、究極の痩せ我慢っていう言い方をしたけど、違ったんですよ」
藤「うん」
水島「そうじゃないんです。痩せ我慢して行った人も、勿論、一部は居たかも分からないけども、本当に意志を持ってね」
藤「うん」
水島「あの戦いに行って散華されたっていうことは、私、特攻のドキュメンタリーとか、それを作って１００人ぐらいの生き残りの人に聞いて一番、解ったのはそこですね。というのは、彼らは自分の人生で戦争が起きたら、それが実際、自分の運命で、例えば戦後に生き残ったオジサン達は直ぐ戦争なんかやっちゃいかんとか、こんなことを、九十何歳のお爺さんがついに語り始めましたみたいなね」
藤「それ、違いますよね」
水島「兵隊なので戦争なんか解っていないですよ。兵隊だから戦闘は解っているんです。生き死にあって本当に人を殺したり殺されたりという戦闘は解っているんですよ。でも、私は戦争を語るジジイを信用しないっていうね。ジジイってお前もかって言われるんだけど、もっと８０、９０のお爺さん達、いやぁ、戦争はいけませんとかね。戦争なんかあっちゃいけない。それはその通りだよと。その通りだけどね、あんたらは一緒に戦って死んだ人達が、死をもって国を守ろうとかね、色んな死生観で、さっき言ったようにやった訳ですよ。
平家物語を見ろ、太平記を見ろとかね、日本は、ずぅ～っとそういうものがあるんでね。ただ、それがガッチリ途絶えている。これは恐ろしい事でね。だから本当に、ある種の絶

望的な気持ちになりますけど、何とかねぇ、矢野さんが言っていることは、私も意見は同じですけど、核武装なんかね。これは、どっちが先かっていうことを、まず、やってみるということとか、なるべく、そういうことを言ってみるっていうことから始めないと、いや、もう本当に２０年前なんか本当に、せせら笑われましたから」
藤「あと、もう一つは、戦後になって平田篤胤っていう学者がとんでもない学者だっていうことになっていますけど」
水島「はい」
藤「彼の著作を読んで見ると、やっぱり、死生観が無ければ絶対に大和魂っていうのは築かれないっていう言い方をしています」
水島「いや、だから、そこがねぇ、まぁ、こんなことを言ったら細かくなるけど、平田理論は一種のイデオロギーに行っちゃっているところ」
藤「そう。曲解されています」
水島「死生観じゃなくてね、皇国イデオロギーって言うかね、そういう方に行っちゃって、ここのところは明治維新の近代化の問題で、哲学だった死生観が、哲学っていうか」
藤「国家のイデオロギーになりました。うん」
水島「それがイデオロギーになっちゃってね。大東亜戦争へ行けぇ～っていうね」
藤「うん」
水島「いや、行くのは別に良かったんだけど、つまり、そういうところがね、あまり言われると平田シンパというか、こういう人に怒られるかも分かんないですけど、本当に私は、それに疑問を持っているんですよ。平田って極めて近代的なところがある」
藤「あれは相当、彼の死生観に急進的な要素が入っているんですよね。だけどもう一つ、言うと、日本って終戦の１年以上前って殆ど兵隊がやられちゃって、戦死者の９割以上が病死と餓死でしょ」
水島「うん」
藤「これは、やっぱり非常に拙い経験で残っていますよ」
水島「いや、そうですよ。ニューギニアの場合は、皆さん、あまり知らないと思いますけど、２０万人が出兵して、戻って来たのが１万２千人ですよ。つまり９０％以上の凄い損耗率で、その中で斎藤中将っていうのが最後のニューギニアの司令官でしたけど、何を選んだかと言うと、有名なエピソードであるのは、１万人の兵隊がそのままだと飢えると。本当に餓死する。まぁ、本当にたくさん餓死しているんですけど、何をやったかって言うと、無謀なオーストラリアに対する攻撃をし、攻撃命令が下って、せめて兵隊として死なせてやるっていうね、みんな、死んだんですよ」
藤「うん」
水島「その生き残った人が餓死を免れてね、というような、だから指揮官というのは本当に、そういうことを選ばなきゃいけない。その斎藤っていう中将は大変、有名な遺書を残して腹を切ったんですね。もう、このニューギニアの地に来たところで、私はここの土になることを決めていたと。
兵隊には、人間を超えた努力を要求して来てという、誠に、えぇ、ということありますからねぇ、だから本当に昔の人が偉いとか、何とか言う以前に、やはり死生観がね、どうやったら取り戻せるかっていうことだと思うんですよね」
矢野「ただ、実際の自衛官の、例えば災害派遣の長期の極限状況になった時の働き方とかを見ていると、今の若い方も含めて、私は、いざとなれば特攻精神は、やっぱり今の若い方もあると思いますねぇ」
藤「あると思います」

水島「いや、だから…」
矢野「そういう環境にないだけの話ですね」
水島「いざとならないと、というね、さっきも言ったように」
矢野「まぁ、それは、ある意味、不幸な事ですけれども、それは残っているとは思いますけどねぇ」
水島「自衛隊の方には失礼かも分かんないけど　ある人で言うと、正直、言うと、自衛隊の半分はそれだと。半分は駄目ですって、私は言われました」
矢野「いや、それは（失笑）」
水島「本当は１００％、信じたいけどね」
矢野「いやいや、いや、１００％とは言わないけど、私の経験では大半はそうだと思いますよ（苦笑）」
水島「いや、それは…」
矢野「それは大丈夫です」
水島「だから、私は、敢えてね…」
矢野「そういうことを言った人は誰か知らないけど（失笑）」
水島「チャンネル桜は自衛隊頑張れの番組をずぅっと作って来たところだから」
矢野「いやぁ…」
水島「現実の問題として今の教育の問題でね、だって軍隊にもならない特別公務員ですよ。戦ってね、もう本当にそういう名誉も一体、どういう形でやれるかっていうねぇ」
矢野「いや、それは報いられるとか処遇がいいとかいう話じゃないんです。いざとなってやらなきゃいけないことは、命懸けでやらなきゃいけないんです」
水島「うん、いや、そう、いや…」
矢野「そういう思いっきりのことです」
水島「いや、だから矢野さんはそうだったから…」
矢野「いやいや、私じゃない、他の人も若い方も、そういうものを持っているということを言いたいだけです」
水島「いやいや、そういうのは勿論、可能性としてあるし、国民もネクタイ締めてね…」
矢野「あいつが、あんなことをやるのかというのは、やっぱり、いざとなれば変わりますよ。それが日本人ですから。私は未だそういう意味では、信じているんですけども（笑）」
水島「うん、だから私も信じたいと思うんで、立場は一緒だし、ただ、私はどうやっても冷徹に見ておかないと、いざとなったら、ほんとにボロボロにされちゃう。逃げまくってね。みっともない」
矢野「だから、そういう人も居ると思いますけどね」
水島「そんなふうになっちゃいけないから」
藤「結局、今、８月１５日前後で語る元生き残りの兵隊さんって、みんな、一兵卒なので、幹部の方は、みんな、勇ましく自決をされちゃっているので、その方達からすれば結局、そういう経験しか知らない訳ですよ。だから、それをもって戦争を語っちゃうから」
矢野「いや、兵隊ですらないですから」
藤「私も自衛隊の幹部の方と多く付き合いましたけど、嫌ぁ、凄いなと思います」
水島「あのう、だから、そうなんですよ。今、言ったようにね、そこをねぇ…」
矢野「幹部だけっていう訳じゃない」
水島「ずぅっと、この２０年、この戦後のね、戦争と大東亜戦争の南京の問題も、ずぅっとドキュメンタリーで調べてやってきたところで見たら、昔の兵隊さんは本当に立派ですよ。サイデンステッカーていう人は、死んだ兵隊の荷物を調べて、書いたものを全部、調

べたそうで、あれが一番、アメリカ軍の情報になったって」
藤「あぁ」
水島「こいつらは、なんだ９０％以上、みんな、文字が解る。歌まで作る（笑）。それで、物凄い勇気があるっていうね。それこそ兵隊クラスでノーブレス・オブリージュというものがあって、とんでもない民族みたいなね。だから特攻を見たアメリカ軍が Crazy って、アメリカ軍は言っていたけども、あれは表面上のことでね。実際は日本兵の凄さっていうのを、アメリカ軍が解っていた。
沖縄戦と硫黄島では大変な戦傷者が出ていましたが、ただ、そういうような形で、私達も創立以来、ずっと『自衛隊アワー』という番組を放送していたんです。何処もやっていなかったけど。それで自衛隊、頑張れで『今日も任務、ご苦労様でした』ってキャスターに言って貰って、でも１０年ぐらい経ったら自衛隊も自分で広報宣伝を始めたので、他のところも色んなことをやりだしたので、うちは十数年間続けた『自衛隊アワー』というのをやめたんですけどね。
ただ、現実の問題で、我々は今、私は自衛隊に、まず給料を上げるとかね、名誉を与える、国軍の軍人として国の為にとか国民の為に命をやるぐらいの、そのぐらいの名誉をやる、それをやらずに、とにかく国の為だったら死んで来いっていうのは中々言い難いっていうかね」
藤「そうですね」
矢野「その通りです」
水島「やっぱり矢野さんの言っていることを伺うと、ちょっと何か嬉しくなりますけどね、そうあって貰いたいと思うし」
藤「でも矢野さんがおっしゃる通り、本当に究極の状態になったら、今の日本人も戦前と同じになると思うんです。だから怖いんですよ」
水島「うん。そうだね」
藤「だから本当に勝てる戦いをしないと、戦前と同じで白人全員を敵に回しますから」
矢野「まぁね」
水島「うん。というのは何故かと言うと、米軍にこれだけやられたら、見て下さい、今、敗戦利得者達のね。跋扈して恬として恥じない、悔しくもない。米軍の基地が未だ８０年あっても疑問に感じない」
藤「そう。何とも思わないですから。守ってくれて安心と思っている人達がいるぐらいですから」
水島「そうなんですよ。だから人間っていうのはそういうもんだっていう現実も見なきゃいけないから、どうやったら取り戻せるかっていうのはねぇ、我々の課題だと思うんですけど…」
藤「すいません」
水島「モーガンさんは、どうですか」
モーガン「そう、これが一番、歯痒いところです」
水島「うん」
モーガン「こういう話になると、必ず守りに入る傾向があると思います。もっと攻めればいいのにと私は考えています」
水島「うん」
モーガン「さっき藤先生がおっしゃった『大義』ですが、私は全く同感で、戦後日本は一つの空白っていうか、一番恥ずかしい世代が今、生きている訳で、もう本当に敗戦利得者ばかりが体制を握っていて、じゃあ何をすればいいかと、アメリカの出番を待つとか」

水島「うん」
モーガン「あいつら、この体制が崩れるのを待つとか、そうじゃなくて動けばいいと私は思います」
水島「うん」
モーガン「例えば、私が知っている限り、日本人一人が今、ロシアで戦っていると思いますけど、ロシアに義勇団を派遣すればどうですか。北朝鮮へ行けばいいと思います。今のイランに行けばいいと思います。日本の政治家一人でもいいですので、日本の政治家、誰か有識者、日本がイランまで行って話し合えば、米を裏切ればいいと思います。先程、ちょっと出た話ですけど、ロスの混乱を煽ればいいのに、それは日本からすれば。日本人としてはアメリカっていう敵を倒せばいいのに、あえてしない。昔の日本の大義が今も正しいし、昔も正しかったし、矢野先生がおっしゃっている通り、５００年間の白人至上主義が今、終わろうとしているところで、世界が大きく変わっているところなんです。
あの米が死にかけています。経済的にも、中国もかなり危ないと思いますが、アメリカの財政赤字、その問題を解決しようとはしないし、トランプは、まぁ、さすが金のトイレが好きな、あのトランプ」
藤「(笑)」
モーガン「お金の使い方は、あまりにも杜撰で、アメリカの国債がもう膨張する一方で、アメリカ、ワシントンっていう経済がパンクすることが、もう時間の問題になっていますし、煽ればいいのに。アメリカっていう所を敵だと思って、倒そうとする日本の政治家は居ますか。
戦後日本は、本当に外国人として南部の人として、それを見て、何故、敵を倒そうとしないか、何故、占領軍を追い出そうとしないか。この日本て本当に平和な国だなと。米軍基地を攻撃しようとする、まぁ、他の国だとすれば米軍基地は危ない。それを一番、狙いたいところ。でも日本では米軍基地に守ってくれているっていう嘘を信じている人も、いっぱい居る程、敵を倒すっていう能力っていうか、常識が無いのかなと本当に歯痒いです。直ぐ守りに入って攻めは考えない。昔の侍とかは遠くから米軍基地を見てどうすればいいでしょうかねぇと、こう考えているところじゃないじゃないですか（苦笑)。動いていると思います。昔の侍。その精神は生きていると思います。何処かで生きていると思います。でも、そういうことをしない限り、何も変わらない。敗戦利得者ばかりが引き続き、この国の体制を握っていて、もう守りばっかりじゃなくて、攻めれば、煽れば、動けば出来ると、私は確信しているところです。
あの米は敵だと思って、敵だと思ったら当然なことするんですよ。北朝鮮と協力して、イランと協力して、ロシアと協力して、私は米露同盟って一応、あり得ないと思います」
水島「うん」
モーガン「何故かと言うと、もしかしたら一時的にあり得るかもしれませんけど、プーチンは西側の陥落を考えているじゃないですか。ラブロフなんかも言っているんですけども、西側を殺したいんです。まぁ、プーチンは当然なことをやりたいです。当然、全世界がそういうことを待ち望んでいます。先程、社長がおっしゃった文明の衝突が、また始まるとか充分、あり得ると思いました。それは、もし、そういうディープステイトの話が通れば、ＢＲＩＣＳを戦わせることは出来るし、ＢＲＩＣＳの台頭を防ぐことも出来るし、文明の衝突っていうストーリーが、やはり説得力があるなぁと思って、ディープステイトからすれば。
じゃあ、日本の大義は８０年前、１００年前と一切、変わらない。白人至上主義との戦いです。戦前の日本の大義が今、何処かで生きている訳です」

水島「うん」
モーガン「それを掴めばいいと、私は考えています。今の時点は、もう、あのトランプは関税で何を持ち出してくれるかと。そういうことを待っているところじゃないと思います」
水島「うん」
モーガン「米を倒しましょう。独立しましょうよ。当然なことじゃないですか。日本からすればジェノサイドされたんですよ」
水島「うん」
モーガン「何を待っているんですか」
大高「暗殺されるからビビっているんですよ」
モーガン「政治家が？」
大高「そう」
モーガン「じゃあ、国民が動けばいいじゃないですか」
大高「うん…」
水島「まぁ、これは、今言った通りね、ある元国会議員が言っていましたけど、安倍さんの暗殺事件で全国会議員がビビりまくっていますって」
モーガン「うん。そう、今、大高先生がおっしゃった通りだと思います」
大高「中川昭一も、そうだし…」
モーガン「じゃあ、そういう政治家は要らないじゃないですか」
水島「ほんとに、その通りですね」
モーガン「全員、倒せば」
大高「ＡＩの方がマシなぐらい」
矢野「だから、あれでしょ、命を捨てる気になれば、何でも出来るっていうことですよ」
水島「本当は、そうなんだよねぇ。ただ…」
モーガン「ＡＩの話、あ、どうぞ、ごめんなさい」
水島「それと、私は、そのね、モーガンさんの米露同盟の話だけど、トランプに、どのぐらい希望を持つかっていうことね、現実には、そういう流れになっていると思います」
モーガン「はい」
水島「ただ一つ、あれはプラグマティックな、現代プラグマティズムの権化みたいな男だから」
藤「(笑)」
水島「今言ったように孫子とかの兵法で言うと、相手のアメリカという国の中にそういう異物が居たら、それを利用してやるというね」
藤「なるほど」
水島「ディープステイトというのは強固な、それこそＭＩ６やＣＩＡやモサド全部を支配している」
モーガン「はい」
水島「或いは金融資本家が全部、やっているところですから、そう簡単に中々行かない。その時、政治権力を一応、持っている人間っていうのは何処までやれるか、必ず裏切る可能性もあるし、向こう側に付く可能性もあると思いますけどね」
モーガン「日本版モサドを創ればいいじゃないですか」
一同「(笑)」
モーガン「頭山満とか、そういう人間が居たんですよ」
藤「だから素地があるんですよ。陸軍中野学校という」

大高「うん」
大井「うん。それがね、今、無いんですよ」
大高「解体されて（苦笑）」
藤「でも創るのは意外と簡単ですよ」
大高「そうね」
藤「その気になったら」
モーガン「やればいい。やってみれば。失敗するかもしれないけれど、やってみれば…」
水島「あれねぇ、一番、リアルな話はねぇ…」
矢野「あるかもしれない」
水島「あの国税のね」
藤「未だ無いですよ」
水島「国税の査察局ですよ」
大井「あぁ、そうですねぇ」
水島「あそこはねぇ、凄いですよ。これだけは政治家とか懐とか下半身迄、全部、調べられて…」
藤「あの財務省の本当の権限の中心ですからね」
水島「だからアメリカとも繋がっているんだけど、ただ機能的に言うと、軍事とか、そういうのに関わらないって形になっているけど」
藤「国税ってアメリカと繋がっていないですよ」
水島「いや、繋がっている」
藤「マネロン対策で、国税が入ってないのって日本だけですよ」
大高「ふぅ～ん」
水島「いや、まぁ、実際は財務省のねぇ…」
藤「いや、本当に入っていない」
水島「いや、まぁ、そこは、ちょっと意見が違うかも分かんない。ただ、今言ったように、それだけの査察力があるのは今、ＮＳＣだ何だらかんだら言っているけれども、全く駄目ですから。あの公安調査庁とかね」
藤「あぁ、まぁ、今…」
水島「全然、そんなものはねぇ、外事警察とか色々あるけども、やっぱり全然、力が無いですよ。そういう意味では本当に一番、真面目に細かい所から何から、実際、７割、８割は諜報活動っていうのは、合法的な書類や色んな物からやって、そこから００７じゃないけどね、ミッション・インポッシブルが出て来る訳で、だから、そういうところ辺から優秀な奴をね、警察官僚とね、あれを…」
藤「私も内庁に７年半、居ましたけど、結局、政治家の腹ですよ」
水島「うん」
藤「だからヒューミントなんて一時期、外務省的な事を、ちょっとやろうとしてバレたら政治家が一切、知らないだし」
水島「うん」
藤「もう全く今の政治家の方には出来っこないですから」
水島「そうだよねぇ」
藤「ＮＳＣなんて創ったって、あれは別にただ単に情報を集める会議であって、情報機関でも何でもないですから」
水島「そう。あれは持ち寄る会議だもんね」
藤「そう」

水島「いや、前に一回、ちょっと内部文書をばらしたことあって、中共の公使は怒ってない穏やかな感じで、いや、尖閣諸島のね、前に見せたと思いますけど、あれで大騒ぎになったそうですけどね。課長級クラスの会議ですよ。尖閣諸島に行かせない為に、どうしたらいいっていうね、なんだ、こんなことを話しているんだっていうのを見て、私も驚いたけど、課長クラスとか次に局長で最後に大臣が決めるみたいなね」
藤「だから、もう省庁型の縦割りですから、何も変わっていないですよ」
水島「そうだねぇ、やっぱり、その通りだ」
矢野「先島の時も一緒です」
水島「あぁ、そう（笑）、いや、というようなことで、でも色々…」
藤「あと、さっきの日本の若者の話で、海外青年協力隊の人達って一つ間違えたら、とんでもない情報機関になりますよ」
水島「いや、あれはねぇ、真面目な凄い…」
藤「うん」
水島「物凄く安い給料で、私はフィリピンのジャングルに行って、手を洗う習慣とかね、トイレへ行ったら、ちゃんと手を洗う習慣とか、それを教える為の、当時は看護婦さんだけど、一人で行って本当にやって、なんていう偉い奴だっていうねぇ、そういう真面目な子が海外青年協力隊には沢山、居たんですよ」
藤「だから、むしろ中野学校のモットーって『暴落は誠なり』なんですよ。金とか女なんて下の下でね」
水島「あぁ～」
藤「本当に相手の懐に入って行って、いざという時に必要な情報を取るっていう意味では、実は、今の日本人って海外に出ていますよね、さっきの大高さんじゃないけど、結局、Honest John だし」
大高「うん」
水島「うん」
藤「最後は纏めてくれるし」
大高「(頷く)」
藤「一時期は、Servant Leadership なんて言われていましたけど、その能力が高いから」
水島「そうなんです。商社マンとか、そっちの方が、やっぱりね」
藤「その気になったら物凄い情報が取れますよ」
大高「在外邦人を使えばいいですよね」
藤「え？」
大高「イスラエル、在外邦人を活用すればいいですよねぇ」
藤「う～ん、本当に現地の為を思って」
大高「そう」
藤「本当に死ぬ程、頑張っているじゃないですか」
大高「人脈、持っているし」
水島「うん」
大高「イスラエルは、それをやっているんですよ。若者を放浪させて全部、情報を集めて」
藤「だから、あとは、やっぱり国家の人、政治家の腹じゃないですか」
大高「そう」
藤「やっぱり置かれている状況が、あまりにも違い過ぎるという風に日本人は思っているから」

水島「それは本当にねぇ、そういう、今、青年協力隊も含めて、そういうのをやろうと思えば、よっぽど、そっちの方が信用できるってね」
藤「藤原機関だとか光機関とか、まぁ、詳細は知りませんけど、それに相当する、もっと、それ以上の情報機関って、その気になったら出来ますよ」
水島「うん、出来ると思いますね」
大高「日本人以上に海外から日本を見ているんですよ。本当に心ある人って居るんですよ」
水島「うちが一回、頼まれたことがあって、海外民族音楽、何とか機構っていうのがあって、これは、実は、私は一回、事務所を貸してくれって言われて貸したことがある。何をするかって言ったら全部の書類ね、民族音楽を調べるっていう形で…」
藤「あぁ～」
水島「その国の少数民族とか」
藤「それも凄いインテリジェンス…」
水島「物凄く詳細な紙で報告がある訳。こういう性格があって、こういうものを食って、こういう傾向があって、親日的であるかとかね、あぁ、すげぇなと思って、つまり他民族、少数民族音楽を調べるという形で、全く完全にスパイやっていたっていうね」
藤「インテリジェンスと表裏一体ですね（笑）」
水島「そうなんですよ。だから日本は昔、そういうことをやっていたっていうね」
藤「そう」
矢野「そうですね」
水島「ちょっと感動しましたよ」
藤「今だって、若い人だったら、もっと上手くできる可能性がありますよ」
矢野「当時は学術団体も協力的でしたからね」
水島「ねぇ、なんか」
矢野「探検隊なんかも、みんな、そうですよ」
水島「そうそう、そうそう。川口探検隊じゃ駄目だっていうね。古いか、はい」
矢野「（苦笑）」
一同「（苦笑）」
藤「いや、だから、その気になったら本当に凄い力を発揮するかもしれないから、逆に怖いんですよ」
矢野「いや、中野学校は７年間ですからね。活動したの」
藤「そう。出来たのが昭和１０年度ですもんね。ほんとに」
大高「ほんとに」
水島「それとね、うちに今、ＧＨＱの焚書が２５００冊ぐらいあるでしょ。その中の情報関係の本は、やっぱり凄いですよ。ユダヤの問題も全部、ちゃんと偏見じゃなくて、これが偉いと思うのは、民族差別的な意識とか人種差別的な意識とか、そういうんじゃなくて、ユダヤのあれが、こういうふうにやって、こういう仕事をやって、こういうことをやっているんだと。これに危険があるとか、こうねぇ、ちゃんと冷静に、こういうのやっているという、だから戦前は意外と、しっかり情報活動をやっていたんですよ」
藤「だから戦後も基本的には変わっていないんですよ」
水島「ね」
モーガン「焚書の復刻版を全部、出版して、その全てをホワイトハウスに送ればいいじゃないですか」
一同「（苦笑）」

モーガン「独立したぞという意味が伝わるかもしれない、そういう大胆なことをしましょう」
水島「いや、いや、だから、これが２５００冊ぐらいあるから全部、デジタル化するつもりです。デジタル化して誰もが見られるようにね。西尾幹二先生が１１冊、焚書図書開封というね、本を作ってくれたんですけども、それも西尾さんに言って、とにかくＧＨＱが日本人から何を消し去りたかったのかね、って言ったら乗ってくれて、本当に１１冊を、書いて下さったんだけど」
モーガン「西尾先生の本をプレゼントとして、ホワイトハウスに送りますか」
矢野「自動翻訳で英文に替えて、みんな、送ればいいんですよ」
モーガン「送りましょう」
大高「(笑)」
水島「あぁ、いやいや…」
モーガン「私達が出来ることは出来るじゃないですか。独立しますと」
水島「そうだね」
矢野「やった方がいいね（笑)」
水島「ほんとは言いたいけども、もう亡くなっている人が多いけど、東大の教授が中心になっているんですよ。ＧＨＱの前で喜んで、この本が、この本がって言って」
藤「まぁ、いかにも、そういう感じがするな」
水島「その連中が大学の中心になって国公立の大学へ行って、今度は私立の大学まで全部、その弟子達が行ったから、完全に日本の大学教育体系がリベラルというかな」
藤「そんなことを言っているとＧＨＱ時代を通じて、内務省と大蔵省の力が替わりましたからね」
水島「あっ、内務省か」
藤「内務省は最後まで抵抗して、大蔵省は直ぐ擦り寄りましたから」
水島「う～ん。内務省がなくなったのは大きいよね。総務省とは違うからね」
モーガン「西尾先生の復刻版の本を、東大の学長に送ればいいじゃないですか」
大井「(笑)」
モーガン「嫌がらせでやりましょうか」
藤「いや、読みもしないですよ」
モーガン「それは読んでくれるかどうかは問題じゃなくて嫌がらせとして、俺達は動いているよと」
藤「いや、秘書が自動消去しますよ（笑)」
モーガン「やりましょうよ」
大高「意味が解らないかもしれません（笑)」
水島「でもねぇ、やっぱり東大の教授だなと思いましたね」
大高「うんうん」
水島「もう、それは何百人が居るはずですよ。ただ最初に聞いたのは五十何人ぐらいね、そこから、だってＧＨＱは日本語が解りませんから、勝手にどんどん焚書にしていったんですよ。所謂、軍国主義的な本みたいなね」
藤「まぁ、だからね、大蔵省は特に、内務省じゃなくて英語が出来ましたからね」
水島「うん」
大高「じゃあ、高い給料で雇われた日本人の協力者が居て、彼らがマスコミと共犯関係になったから、ここがおかしくなった」
水島「いや、そう。そういうことです。全くその通り。それで、あのうねぇ…」

大高「裏切り者がいっぱい居た」
水島「映画もねぇ、ＧＨＱが全部、映画監督を呼び出して、何故、お前は、戦時的な宣伝映画をやったのかって言ったら、悔しいけれども殆どの映画監督が軍に強制されて不本意ながらやったって答えた。ただ『明治天皇と日露大戦争』という映画を撮った人は、今、ちょっと名前が出て来なくて、この人だけは、いや、貴方の国だって映画監督は、みんな、国の為、国が戦っていればやるから、私は映画監督だからフィルムをつくって、それで戦ったんだって言ったら、そこだけエピソードを聞くと、尋問したのが中尉だったらしいけど、握手を求めて両手で握手して初めて侍らしい日本人に会ったって、それだけ居なかったっていうことですよ」
一同「う～ん」
水島「今の映画監督協会で、私も映画監督協会の会員ですけど９割、９割５分、みんな、リベラルの人ですからね。前に『靖國』という、とんでもない映画をつくって、映画監督協会が勝手に推薦を出しちゃったんですよ。私は会員だからね、誰の許可を得て、こんな推薦を出すんだって、韓国の人が作った映画だからね。こういうのばっかりですよ。だからメディアも映画の世界も映像の世界も殆ど、みんな、自由な表現が出来ていない。私の場合も今、YouTube で私の南京の映画は直ぐバンですから上げられないんです。見られないようになっているんです」
藤「そうでしょうね」
水島「本当にねぇ、そういう表現の自由っていうかね、あるようで無いっていうのはね、でも粘り強く別のサーバーを使ってやっていますけどね。うん。こういう状態ですから、まぁ、これから、みなさん、頑張っていかなきゃいけないっていうことになるんですけど、じゃあ、纏めでやっていきたいんですけど、モーガンさん、途中になっちゃったんですけど、いいですか」
モーガン「はい、大丈夫です。もう充分、ヒートアップしました」
大井・大高「(笑)」
水島「はい。じゃあ、宇山さん」
宇山「はい。私は、この中東を安定させる為の唯一の方法っていうのは、ミアシャイマー教授も言うように、実はイランに核を持たせるということではないかなと思います」
水島「はい」
宇山「イランに絶対、核を持たせんぞぉっという、その一点張りでは、決して中東は長期的に安定していくことは決して無いと思います。イランにも核を持たせましょう。サウジアラビアもそうすると核を持ちたいと言うでしょう。それも持たせればいいんです」
水島「うん」
宇山「お互いに『核抑止の均衡』という理論の中で安定をさせていく。私はバイデンなんて全く評価しませんけれども、実はバイデンが２０２３年に、サウジアラビアと交渉してイスラエルとの国交正常化を条件に、所謂、核の民生利用を認めるという合意寸前のところまでいった訳です」
水島「あぁ…」
宇山「バイデン政権の時、しかし議会の民主党のお膝元から、そんなことは許さんぞぉといって反対にあって、結局、この１０月７日のハマスの襲撃ということで、この話は流れましたけれども、しかし、実は合意の寸前、一歩手前の所までいっていた訳です。この民生利用を認めるっていうことは、イコール軍事転用しても構いませんということなんですね。
実は、このＵＡＥもカタールもバーレンも、みんな、持ちたい訳です。私は、５月にトラ

ンプ大統領がカタール、ＵＡＥ、サウジアラビアを訪れた時には、その辺の話も必ず、それぞれ各国としているというように思います。ただ、それでも私は、ちょっと危ないのは先程の矢野先生の一神教の話じゃないけれども、この核ミサイルをぶっ放す奴が居るんじゃないのかなとすら思うんです。やっぱりイスラエルですね。この度のイスラエルの６月１３日の作戦名『ライジング・ライオン作戦』というのに、私は驚いたんです。
このライジング・ライオンというのは旧約聖書の創世記から取られていることであって、旧約聖書の中に、こういう一節があるんですねぇ。ユダの民よ、立ち上がれ、ライオンの如く、獅子の如くという言葉があるんですけれども、これは、この敵を殲滅すべしという文脈の中で、旧約聖書で使われている言葉な訳ですね。それを作戦名にするというぐらい、やっぱりイスラエルというのは、ある意味、狂っている訳ですよ」
水島「うん」
宇山「だから、こういう連中が核を持つと、どういうことになるかということも合わせてリスクとして考えなきゃならんのだけれども、しかし、私は、やっぱり『核抑止理論』という言葉の中で、中東を安定させていくというのが、まずはいいんじゃないかなぁと思います。翻って私達は日本の直ぐ近くに北朝鮮がありますけれども、トランプ大統領は北朝鮮が核保有国となっているというような発言を、つい先般もしております。
もしトランプ大統領が中国包囲網をするという事の中で、北朝鮮を抱き込みたいと、核保有国として認めてあげるよと。その代わり長距離のＩＣＢＭだけは廃棄してねと。それで、中距離で日本に届くようなものは持っていても構わないよ等というような合意をしたら、最悪ですけれども、しかし、私は無きにしも非ずだと思います。
その時、日本は、それを逆手に取って、日本も北朝鮮を核保有国として認めますよというぐらいのことを言ったらいいと思うんですよ。その代わり、日本も核保有国になりますよと。北朝鮮は核保有国でトランプ大統領もアメリカも認めていると。日本もそれを認めるという限りに於いては、日本も核武装するのが正当な権利ですよということを訴えながら、核武装するということを戦略的に進めていくのが良かろうというように思います。以上です」
水島「はい。有難うございます。韓国は７割、核武装賛成というね」
藤「あぁ、そうでしょうねぇ」
水島「これは日本と全然、違うところですね。我々から見ると、これは抑止力の事を考えると、台湾はどうなんだということになってくると思いますね。じゃあ、大高さん、お願いします」
大高「はい。核武装はね、宇山さんがおっしゃる通り、やっぱり理論武装も大事で、現実的にどうやっていくかっていう、矢野先生等ね、アメリカを、どう説得してっていう、その交渉みたいな、そういうのは核になるのかなと思って聞いていました。最後に日本人は、もっと日本を大事にしましょうということで、時間が無いので全部、読みません、簡単にこれだけ紹介して終わりたいと思うんですが。有名な文章です。アメリカに帰化宣言する時には、これを読ませるんです。
『私はここに誓って、これまで属していた、または市民であった、いかなる外国の君主、権力者、国家、または主権に対する一切の忠誠と服従を完全、且つ絶対的に放棄する事を宣言します』と、まぁ、長いですよ。これだけのことを読ませる訳です」
藤「なるほどねぇ」
大高「日本を比較してみて下さい。この簡単な（失笑）『私は日本国民として、憲法、及び法律を尊重し、誠実に行動する事を誓います』私が中国の工作員だったら、抵抗なく読みますよ」

藤「(笑)」
大高「これねぇ、あまりにも国を大事にしていないですよ。今迄の先人達が築き上げて来た我が国をね。せめて、このアメリカの倍ぐらいの厳しい宣誓の文章っていうのは読ませる必要があると思う。それだって読んだって、どうせ工作員も入ってきますよ。だから、きちんとスパイ防止法なりやって、でもねぇ、こういうのは大事だと思うんですよ」
水島「大事だと思いますよ。言葉って本当に大事ですよ」
大高「ね、この儀礼もそうですけど」
水島「はい」
大高「これも早急に見直すべき」
水島「まぁ、舐めているからね」
大高「はい」
水島「国語とか、そういう認識がめちゃくちゃないし」
大高「はい」
水島「入って来る隊員に対しても馬鹿にしていますよ」
大高「そう。こういうところに足元を見られるんでね、良くないなと思っています」
水島「そうですね。昨日の討論でも帰化する条件がね、石平さんが言っていたんだけど、簡単に、これでいいのっていうぐらいに、ちゃっちゃっ、ちゃっと書いてね」
藤「あぁ」
水島「もう、その住所とあれでやったら、そういう約束も何も無いんだよ。全部、本当に安いマンションを一つ買ったみたいな感じで、通っちゃったからビックリしたって」
大高「ほんと、国体が崩れますよ」
水島「だから、そういうことですよ」
大高「うん」
水島「本当に、よくそれに表れていますよね」
大高「はい」
水島「本当に」
モーガン「今、大高先生がお見せ下さった最初の文章」
大高「はい」
モーガン「その最初の、あぁ、ごめんなさい、失礼致します」
大高「はい」
モーガン「この最初の段落を言える自民党の一員は一人も居ないですよ」
大高「あぁ」
モーガン「みんな、本当に外国に奉仕している訳ですよ」
大高「ほんとは（笑)」
モーガン「本当に産経新聞の奴らもそうですよ」
藤「(笑)」
モーガン「こういうことを言える産経新聞の人は、一人も居ないですよ。みんなワシントンの人間だから本当に情けない、情けないことだなぁと思いました。失礼しました」
水島「はい、有難うございます。大高さん、いいですか」
大高「はい」
水島「はい、じゃあ、藤さん」
藤「はい。随分、専門外のことを勝手に喋って来ましたけど、最後にエネルギー、原油で締めたいと思っていますけど、３０日に経産省が統計を出したんですけど、実はエネルギー安全保障上、結構、画期的なことが起きていまして、５月の日本の原油の輸入って、中

東依存度が９０％まで下がったんですよ。実は、それをアメリカから８％買っているんですね」
大井「なるほど」
藤「史上最高です」
水島「おぉ～」
藤「だから２０万バレル」
水島「うん」
藤「だから別にトランプさんと偶然の一致ですけど、トランプさんが原油を買えって言い出しましたよね」
水島「うん」
藤「日本の石油会社が２０１９年に日米貿易協定をつくった当時には、未だアメリカの原油を買う気がなかったし、アメリカも今程、輸出しなかったので、なれなかったんですが、今、大体、日量４００万バレル、日本の大体需要量が２５０ですから１．５倍以上の原油を輸出していて、しかも最近の貿易摩擦で中国が一切、アメリカの原油を買わなくなったんですよ」
水島「うん」
藤「だからアジアに対するアメリカのマーケットが減っているので、多分、それを見たかどうかは別にして、トランプさんが買えと言ったと」
大井「うん」
藤「今や、もう日本の石油会社はアメリカの石油を買えるようになったんですよ。理由は元々アメリカの原油って、中東に比べて油の質が良くて割高だったんですよね」
水島「あぁ。う～ん」
藤「だから日本の石油会社ってアラビア石油のカフジ油田を始め、あれ、カフジ油田って世界で最悪の原油だったんですけど」
水島「あぁ、そうなの、へぇ」
藤「それを処理できる設備を完備しちゃったので」
水島「あぁ、そうなんだ」
藤「一時期は世界で一番質が悪くとも、安い原油を買い漁っていたのが、この数年間、ＯＰＥＣプラスが減産しているので、アメリカの原油の方が安くなっちゃったんですよ。質が良くて安くなっている。凄くリーズナブルになった」
水島「う～ん」
藤「さすがに、それで日本も気づいて８％。私の単純な計算で、あと５０万を増やしたら多分、充分、増やせると思うんですけど、軽く１兆４千億円、貿易赤字が減ります」
大高「中東より安いんですか？」
藤「中東は減産しているから」
水島「うん」
大高「ふぅ～ん」
藤「だから絞っちゃっているから割高になっているんですよ」
大高「なるほど」
藤「一方でアメリカっていうのは軽油中心ですけど、全然、生産制限していないから今、物凄く割安。バレルあたり５ドルぐらい違うんですよ」
大高「へぇ～」
藤「韓国辺りも５０万バレル買っているんですけど、輸送コストは、アメリカからの方が高いので、政府が一部、補助しているんですよ」

大高「ふぅ～ん」
藤「そうすれば経産省の話になりますけど、自動車で揉めているなら、同じ経産省の中の原油を買っちゃえば、トータル・パッケージが出来るんじゃないかっていうことで、やっとトランプさんが言ってくれたことで、少し日本の経産省も考えてくれば結構、上手くいくことがあるんじゃないかなぁと思っています」
水島「なるほどね。確かにアメリカのタンカーだったら、攻撃も中々ね」
藤「もう、もう、それは、もう」
水島「可能性、少ないしね」
藤「第７艦隊がいますから」
水島「うん」
藤「だから、それで安心だと。それから最後ですけど、今日、トランプさんの安全保障、外交の問題が結構、ありましたけど、私は、これから２か月は、もうトランプさんは内政に掛かり切りになると思います」
水島「なるほどね」
藤「もう外交の問題だって全く解らない。これはどうでもいいっていう話になって、要は今の減税法案もそうですし、それから連邦債務の上限問題も来ますから、それで、もう、とんでもないと。それどころじゃないということで、一気に内向き化しますので、その時に世界がどう動くか」
水島「うん」
藤「本当にアメリカが内向き化したら、本当にパワーバランスが変わりますから」
水島「うん」
藤「そこも、これから少し夏場を通して注目していきたいと思っています。以上です」
水島「どうですか、この７月９日でしたっけ」
大井「７月９日、関税の」
水島「そうだね。あれは２５％とか言っているじゃないですか」
藤「むしろトランプさんは２５％から上げる可能性もありますよ」
大井「うん」
水島「あぁそう、やっぱりね」
藤「２５％から上げるっていうことも言っていますから」
水島「あぁ、う～ん。というのはね、あの人の言葉だからね、何処までとか、よく言われるけども、結構、そこは断固としているよね」
藤「うん、だから、さすがに彼らもトランプさんも原油とか米っていうことを言い出しましたよね。米なんか買ったって、たかが知れているし、もし買ったとしてもカリフォルニア州ですから、憎きギャビン・ニューサム（Gavin Newsom）の手柄にしかならないですからね」
水島「うん、そうだよねぇ」
藤「だってアメリカの石油業界はトランプさんに献金していますから」
水島「うん」
藤「それは原油を買った方がいいし、日本の中東依存度も一気に２割以上、下がりますから、こんないいことは無いので、政府は是非、決断して欲しいなと思っております。以上です」
水島「なるほどね。何か迷っていることの理由はあるの」
藤「だから、あのう…」
水島「今の話で言うとね…」

藤「多分、石破さんにはその点は一切、事務方から上がっていないはずですから」
水島「あぁ～なるほどね」
大井「なんて情けないんでしょうねぇ（苦笑）」
水島「じゃあ、全然、解っていないじゃない。だから、もうねぇ、ギリシャ並みの…」
藤「でも経産省も、例えば２０１８年、２０１９年の貿易協定の時に、アメリカ側が日本にアメリカの原油を買えっていう話だったんですよ。拒否しているんですよね。だから、はなから駄目だし、今の石油業界からしてみても、普通に聞いたら、いやぁ、いいですよなんて言うんですけど、足元を見ていると、どんどんアメリカの原油を買い出していますから、これ、ちょっとそういう面が替わったかなと思っています」
水島「まぁ、今の時点では、そう悪い話じゃないんだよね」
藤「非常に中東依存度が下がるし、質の良い油を安く買えるんですから」
水島「うん、そうだよね」
藤「こんな、いいことはないと思います」
水島「なるほどね」
藤「はい」
水島「はい、有難うございます。じゃあ、大井さん、お願いします」
大井「はい。やはり、今、日本の大戦略、グランド・ストラテジーをどう組み立てて行くかって、きちんと論理的に世界に向って説明しないと、もう個別にあぁだこぅだ言われてもどうしようもない。まぁ、藤さんみたいな方が、石破さんに付いて、ちゃんと教育すればいいかもしれませんけども（笑）、本土防衛ですよね。矢野先生がおっしゃったように、本土防衛が今、一番の喫緊の課題だと思います」
水島「うん、全くそうですね」
大井「核武装するとかしないとかっていうのもあるんですけど、私は、やはり食糧自給とか、我々、どうやって生きていけるんだっていう、もう根本的にライフラインの確保の上に本土防衛ですよね」
水島「そうですね」
大井「敵が攻めて来たら、どうするんだと」
水島「う～ん、ほんと、そうですよ」
大井「核武装も含めて本土防衛。食糧自給の話だと、やはり強い経済を持たなければいけない。基本的に食糧自給、まぁ、食べていかなきゃいけないし、水の確保、それからエネルギーをどうするんだっていう、この３つですよね」
水島「はい」
大井「水、エネルギー、ご飯っていう感じで、そういう基本的に大戦略を立てて優先順位はこれですと。だから、そこから今のトランプ関税については、こういう風にディール出来るんじゃないかって、シナリオをばぁ～っと優秀な官僚が立てて見せるとか、法案は、こういう風につくれますよとかね」
水島「そうですよねぇ」
大井「そういう基本的に、普通の企業だったらやっているような戦略っていうんですかね、それが全く機能していないので、どうなっているんだろうと思います。はい」
水島「いやぁ、全くそうですねぇ」
大井「だから基本的な国体そのものがなっていないし、勿論、アメリカの従属だ、従属だと言って、まぁ、そうかもしれないけど、じゃあ、そこから具体的にどうするんですか」
水島「そうです」
大井「それを、我々が、ちゃんと具体的に作っていかなきゃいけないんですね」

水島「うん」
大井「金（かね）は何処から出るんだとか。大体、お金の流れをきちんとしていけば、今、何が問題かって見えて来るじゃないですか。イーロン・マスクは喧嘩しちゃったけども、ＤＯＧＥをやった時に、やはり国民から戴いたこの金（かね）は何処へ行っているかって、ちゃんと粒々見て行ったら、ＵＳＡＩＤがとんでもないことになっていたと。テロリストに、これだけ具体的に、こいつのところに入っていたっていう、出てきたら潰せとなるじゃないですか。だから、それって、きちんと対処していくって言うんですか、そういう何か一つの戦略体系を作って、一個一個、潰していくしかないと思うんですよね」
水島「そうですねぇ」
大井「だから、その為には世界を俯瞰して、今、ここで皆さんが話しているような、どういう問題があって、この先、どうなりそうかっていうことで、もう全部、動いていくしかないと思うんですよね」
水島「そうですね。今、食糧安保の問題だって、米をちゃんと何十年も減反して来てね」
大井「そうそう、それで減反してお金、払うって、どういうことですか」
水島「そうですよ。これ、お百姓、無くしてね、だから減反やめるっていう政策と、もう一つ、この間、農業問題を議論した時も出たのは、５千億円あれば、全ての農民に戸別補償できるって」
藤「うんうん」
水島「５千億ですよ。ウクライナに３兆円のお金を送ってね、そういう金があるならっていうね、私は鈴木さんという東大の教授に聞き返しましたもん。えっ、５千億ですかって、いや、本当にそうなんですよ。消費税をゼロにするとか色んなものは二十何兆が要るでしょ。でも今の農民全員がちゃんと暮らしていける為の戸別補償は５千億円で出来る。ということは、お百姓をやめないで済む。それから若い人達もそこに就くことが出来る。農民になるには１０年、１５年かかるんですよ。ということがあれば、高い金じゃ全然、ないっていうねぇ、もう一回、言います、大阪のＩＲに１３兆円をかけようと思っているんですよ」
大井「う～ん」
水島「馬鹿じゃないのかっていうね」
大井「異常ですよね」
藤「今の米価の高騰って１９１８年に米騒動があったじゃないですか、あれと同じぐらいですよ」
大井「あぁ～」
水島「う～ん、ねぇ」
藤「あれだけ社会で暴動が起きて内閣が倒れましたけど、日本って本当に変わらない国ですねぇ」
水島「いや、全くそうだね、はい。というようなことで、本当に一個一個、具体的にやればいいっていうことが出て来ると思うんですよね」
大井「だから参議員選挙も誰が何を言っているかっていうよりも、具体的に何をするんですか、この人はと。行動を見たいですね、行動を」
水島「そうですね」
大井「はい」
水島「大事だと思います。税金の問題もね、例えば食糧だけゼロにするとか色々減税を、自民党以外、みんな、言っているけど、ちゃんと見分けないといけないっていうね」

藤「あぁ、そうですね」
大井「そうです」
水島「インチキなのがありますからね」
藤「ありますね」
水島「２万円を貰って騙されちゃいけないよってね、そうやって後で３倍、４倍取られるんだからっていうね。はい、有難うございます。矢野さん、お願いします」
矢野「私は、３つのことをお話したいんですけど、一つは価値観の問題で、さっきから出ている一神教を、どうするかっていう問題ですが、私は旧約聖書以来の選民思想を打破するということがどうしても必要だと。相対化しなきゃいけないと思います。それでＧＯＤというか創造神、唯一絶対の創造神という、これは、もうキリスト教の中でも空洞化して信ずる人は減っているかもしれませんけど、私は、はっきり言って、これは一つの人為的につくられた妄想だと。ＧＯＤなどいうのは、そもそも無いと。
現代の科学の知見でも、そういう創造神というのは別に必要性が無くて、ちゃんと現実の血汐として自然というものが、まず、あったと。その中から時間、空間も生まれて進化が起こり、生物が生まれて進化して人間が出て来ている訳ですね。そういった宇宙的な長い歴史の中で、この世界がどの様に創られたかっていうことについて、やはり無理のない考え方というものを、もっと広めていくというか、こういった我々の民だけが神から約束された選民であるという、そういう思想を、まず打破することが必要だと思います。
この選民思想というのは結局、今のグローバリズムとか、或いは共産主義も全く同じですけど、一部、エリートによる大衆支配という、それを正当化する思想になっていますし、今のガザ、或いはウクライナもそうですが、それがハルマゲドンを呼んで世界を最終戦争しなければ、我々は救われないという狂気を招いていると。
だから、これを何とか、やはり宗教とか倫理、道徳の問題も含めて、説得していかなきゃならない。その点では日本人の生き方と言うか、やはり古来から持っている神道の自然観や神概念、こういうものを、もっと広く理解して貰うということが必要だと思います。
今、熊野古道とか伊勢神宮に来る欧米の人が増えているんですけど、やっぱり言葉ではないけれども、そういった雰囲気というか自然信仰というものでの、一種の回帰っていうのが起こっているんじゃないかと思います。もっと、この流れを強く進めていくべきだと。日本人は、もっと自信を持って自分達の価値観を訴えるべきだと思います。
それから、二つ目に核の問題ですけれども、宇山さんが言われた通りですが、私は、このままで行くと、まず中東の中、それからヨーロッパでも核の拡散が起こるだろうと言いましたけど、次は北東アジアで起こると。もう既に北朝鮮が持っている。それから韓国は、もう原潜を造っていますし、ＩＣＢＭに使えるような弾道ミサイルも開発しているんですよ。韓国と北朝鮮が持って日本が持たないとなると、どっちの国からも恫喝を受けて、我々は、それに屈するということになり兼ねない。それから台湾と大陸の関係も、台湾が核保有をすれば、大陸は簡単に手出し出来ないし、それからアメリカも台湾を無視は出来ないということになりますから、むしろ地域は安定すると。だから、私は、北東アジアについても、日本が原潜を持つと同時に、韓国も、それから台湾も核保有をすると。
核保有をするということは、中共が武力侵攻の一つの要件だというように言ってはいるんですけれども、しかし、曖昧戦略を執れば、そういった武力発動の機会を与えないまま、事実上の核保有国になることも出来ると思います。こういった状況になると、ＮＰＴ体制自体が崩壊していくと。現実には、もう既に崩壊しているんですよ。今回のイラン攻撃で、はっきり判ったことは、軍事力によっては、もう核を保有しようという強固な意志と、国家、団結をした国に対しては、放棄させられないということです。

これは過去の核開発の歴史を見ても、北朝鮮にしろ、インド、パキスタンにしろ、全てそうですね。かつては中国、フランスもそうだった。実力によって、軍事力によって核放棄はさせられないと。且つ、空爆によって相手国の軍事力を奪うことも出来ないと。これも、戦史から出ていることで、いずれにしてもＮＰＴ体制が崩壊して核拡散が進んでいく。
それじゃあ、最終的にどうするかっていうことになると、やはり核の国際管理というものを考えなきゃいけないということで、やはり、これを日本は被爆国として今後、訴えていくべきだと。ただ、その前に日本自身の防衛ということ、自立ということ、それから域内の安定ということを考えると、日本が核を持つことは必然だと。それは国際社会の為にも必要だということを言いたいと思います。
最後にエネルギー、食糧の問題ですけど、私は電力が鍵になると。これからＡＩとか色々出て来ますけど、電力需要は益々高まる訳で、今の自然エネルギーでは全く話になりません。不安定だし非常に高くつく。それから、あと廃棄物処理も困るということで、色々な弊害があります。やはり小型原子炉の安全性の高いものですね。普及させて、この電力需要は電力が安く供給できれば、産業力が上がるだけじゃなくて、例えば食糧も地下に人工農場のようなのを作ってＬＥＤで食糧生産するとか、海洋資源開発をして漁業資源とかを使うとか、まぁ、これは海底の資源の問題ですけど、マンガン団塊とか、海中の金とかウランを固定するとか、こういった色んな使い方が出来るので、私は小型原子炉の開発と配備っていうのは絶対に必要だと思います」
水島「うん」
矢野「それと、もう一つ言うと、ミサイル防衛システムについても今、粒子ビーム兵器とかが出て来ていまして、これは、ある程度、可能性があります。粒子ビーム兵器を使えば、殆ど無限に弾を撃てるということで、コストパフォーマンスも全く変わって来るんですね」
水島「そうですね」
矢野「もうミサイルをミサイルで落とすという時代ではないということで、これからは、ドローンの密集戦法、群集戦法が出て来ますから」
藤「そうですね」
矢野「対抗するには粒子ビームとか、或いは、素粒子を使うとか全く新しい兵器システムに替えなきゃいけない。やはり、これにも原子力は電源として鍵になります。まぁ、そういうことです」
水島「なるほど。はい、有難うございます。ほんとにね、矢野さんに今、具体的に色々と言って貰ったけど、一つだけ、我々がいつも生きる中で困難になっているのは、さっき言ったように、一神教の人達に説得で変えることが出来ない。或いは、イスラム教の人達に、あんたらの考えは、ちょっと違うから駄目だよと言っても変わらない。恐らくユダヤ教もそうです。或いはキリスト教もそうだし、福音派の人達も信念でやっている人達だから、本当に、これじゃ辛い。だから戦争が起きるっていうね。でも、こういうことを含めて、ただ、矢野さんが一番、指摘して大事なことを言ってくれたのは、こういう人達は自分達が正しいと思っているから、他の人達の存在、異教徒として認めない、旧約聖書の中には異教徒は本当に殺してもいいとか抹殺してもいいというのが具体的に入って来ているということを含めると、本当に人類のそれぞれの伝統や文化の中で育ってきた宗教や習慣ですから、そこを本当にやらなきゃいけないけど、矢野さんが言うように、我々が核武装したり、ちゃんとした世界観を示したりするようになれば、他の人達も、あの考えって悪くないんじゃないのっていう形にもっていかないと」

矢野「まず生存確保できないと、価値観を変えることも出来ないんです」
水島「そう、そうなんだよ」
矢野「生き延びないと何も出来ない」
水島「お前らなんかそんなことやれないくせにっていう風に言われちゃうんでね。我々が、しっかりしなきゃいけない。それと私も台湾の問題にずぅっと関わって来て、チャンネル桜の番組でも、まだ『台湾アワー』っていうのをやっていますけども、現実に本当に、私が凄く嫌だと思うのは、よくね、昔、台湾と仲良かった人が行って、いやぁ、日台は、もう運命共同体で頑張りましょうって言ってね、それで酒飲んで軍歌を歌って終えて帰って来るみたいなね、これ、駄目だからね。本当に私は嫌気がさした。
若い友人達も台湾を思う人達も、知り合いが沢山居るんで思うけど、本当の台湾と連帯すると言ったら、我々が核武装する事だって思いますよ。本当に日本がしっかりした形になればね」
藤「そうですね」
水島「そうそう中共や色んなものも手を出せなくなる」
大井「うん」
矢野「いや、核前線を共有すればいいんですよ」
水島「だから、まぁ、それをやったら…」
矢野「(笑)」
水島「でも中共はね、台湾を自分のものと思っていますから、必ず核武装って言ったら、もう、それこそ爆撃してね、もう一気にやりますよ」
矢野「あぁ、そうですか。潰してきますか」
水島「だから、そういう意味で言うと、我々が本当に手伝うことは、具体的に何だろう、台湾と連帯っていうのは、我々がしっかりする、存在感をきちっと出せること、それから今、矢野さんが言ってくれた、本来持っている日本人の世界観とか、こういったものを見せたところで、アピールできるようになってくるんじゃないかっていう気がしますね。
それから具体的に食糧安保の問題も、我々は米を作らなきゃいけない。さっき言った高々５千億円っていうとあれですけど、そのお金で農民がもう一回、生き直せる、減反政策をやめる。それから農協や農林中金のお金、１５５兆円ですか、そんなものをアメリカに捧げるなんていうことを、小泉進次郎や石破に絶対にさせたくない。郵政民営化の時に３５０兆円もやられましたからね、どれだけ捧げて、いや、本当に酷い話ですよ。
現実には、我々が奴隷の状態で居るっていうのを合理化しないことだと思いますね。絶対、違うっていうことを考え続ける、言い続けるっていうことじゃないかなと、本当に思いますけどね。どうでしょうかねぇ。ただ、やっぱり、おとなしくてね、それこそ卑怯で嘘つきでっていうのも、日本の文学には太宰とか裏切りのユダとか色んなね、気が弱くて裏切ってしまう人達が沢山、遠藤周作さんの小説の中にも出て来ます。
そういう人達までちゃんと救えるようなね、国民全体がレベルアップしていく。でも、私は、まず少数の人達がきちんとしないと駄目なんじゃないかなぁという気がしています。我々からしっかりしようよと。そうしたら多くの人も勇気を持って立ち上がることが出来るというねぇ、そういう日本を信じたいなと、今日は思いました。本当に大変ですから、頑張りましょうっていうことしか言えないんですけどね。どうも有難うございました」
大井「有難うございました」
矢野「どうも有難うございました」
一同「(礼)」

＊＊＊＊＊＊　お　わ　り　＊＊＊＊＊＊